

---

# 切れないモノ

音々音音音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

切れないモノ

### 【Nコード】

N5644W

### 【作者名】

音々音音音

### 【あらすじ】

大陸は大きく分けて三国に分けられる。魔術という才能で人々を支える王国。科学という技術で暮らしを支える国。未だ戦争の恐怖のイメージが残る帝国。舞台は魔術が栄える王国。国が設立した魔術学園に一人の少年が入学する。全てを失い、全てを捨てた少年がこの学園に入学した目的とは？

・ 初稿の投稿です。拙い文章やミスが目立ったりしますが、よろしくお願ひします。感想とかももらえると幸いです。

## プロローグ（前書き）

初めての投稿です。拙い部分が目立ちますが、よろしく願いします。

## プロローグ

少年は炎の海の中に居た。

灼熱の熱気が絶え間なく襲う中で、微動だにせず、ただ視線を落として俯いていた。

元は小規模だった村が、もう灰の集落と化してしまった。

無慈悲に、炎は村を飲み込んでいた。

熱気や火の粉が徐々に体力を削っていた。

塵と化した灰が、呼吸を苦しくさせた。

もう何時間も燃え続けているのに、炎は止まる事を知らなかった。それどころか、未だに勢いは増している。

これ以上、燃やすものはないはずだ。

木が、藁が、草が、家が、馬や牛などの家畜が。

そして、人が。

周りのあらゆるものが燃えてしまったはずだ。

バキバキッと、炎によって崩れる木の音が、悪魔の嗤い声のように聞こえる錯覚さえ覚えてしまっていた。

嗤い声を上げながら、悪魔は口から黒い煙を吐く。

黒い煙は分厚く、焼けるような温度で、上空を覆っていく。

青空を掻き消すように、煙が立ちこめていた。

炎の悪魔は、少年の知り合いを、友人を、家族を、故郷を焼き尽くしてしまった。

少年の手には一本の刀が握られていた。

刀身が異様に長いその刀の長さは、持ち主である少年の身の丈を軽く越えていた。

少年はその刀を握り締めていた。力強く握り締め、手が充血するほどだ。

燃えさかる炎の中、少年はたった一人だ。

周りに誰も居ない。居たとしても、既に火だるまの状態だ。だか

ら、少年は助けを求めない。

少年はゆっくりと動き出した。

握った刀の鞘をゆっくりと抜いた。

現れた刀身の刃に、燃えさかる火炎が映り込む。

少年にとって周りの全てを奪った炎が、その長い刀身に映し出される。

少年は刀を見つめる。

少年が抱える思いは誰にもわからない。

その時、少年は何を考えていたのか。

止まることを知らない炎の勢いに、怯えていたのか。

それとも故郷であるこの場所が、火の海である現状に絶望していたのか。

あるいは、家族や友人、知り合いが焼死してしまった事に悲しんでいたのか。

それは少年にしかわからない。

だが、今わかる事がある。

それは刀を見つめる少年の瞳には、ゆらゆらと揺れる炎が映っていたという事。

ただそれだけだ。

## 始まりの出会い

「……多いな、おい」

春、それは始まりの季節とも言える。

それはここも同じであった。

一際豪華で巨大な校門、そこには真新しい制服に身を包んだ学生や、その様子を微笑ましく見つめる父兄の集団で溢れていた。

入学式である。

今日はここ、王立レーンベルク魔術学園の入学式の日であった。

家族と談笑したり、緊張で顔を硬くしている初々しい学生の姿が目立った。

それは先ほど咳きを漏らした少年も同じであった。

齢十六にしては高めの身長、細身ながら引き締まった体、短く切られた黒髪は剣山のように逆立てられている。

その顔は若さが出ているものの、目つきが鋭く、何処か大人びた瞳を持っていた。

「……つたく、この時間でこの人数かよ。もっと早めにくれば良かったな」

再び漏らした咳きには、溜息が混じっていた。

入学式、少年は当然混雑することを予想していた。

だから、入学式の会場である体育館の開場時間の三十分、もっと言えば、入学式開始時間の一時間前に来たのだ。そうすれば、多少なりとも新入生と父兄の混雑は避けられるだろうと思っていたのだ。しかし、結果はあまり満足出来るものではなかった。

ここに入学する生徒が真面目なのか、あるいは少年の考えが甘かったのか。

どちらにしろ、溜息を漏らすほどの人混みであった。

息苦しいとまではいかないが、それでもこの人混みの間を縫って移動するのは困難なものだろう。

とりあえず……適当に空いている場所を探るか。

少年は人の合間を縫って、奥へと進む。

人との接触を極力避けながら、人気のない空間を探し出す。

場所はすぐに見つける事が出来た。

恐らく中庭と思われる空間に、石造りのベンチがあったのだ。日陰になっているので、適度に時間を過ごせるだろう。

少年は迷わず座った。座ってから、巨大な石造りの校舎を見渡す。王立レーンベルク魔術学園。文字通り、魔術の才能を育てる学舎である。

魔術はこの大陸全土に渡って扱われる力だが、その中でもこの国は特出している。

他国と比べて、この国の魔術に対する力の入れ方は一段と違った。このような学園がある所から想像出来る通り、教育の一つとして魔術を取り入れているのだ。恐らく、他の国には魔術の学校など存在しないだろう。

日常生活においても、料理用の火や製氷など、ほとんどが魔術に頼っている。魔術の扱いに長けていれば、国の政治関われる役職にまで就けるぐらいだ。

それだけ、魔術というのはこの国の核を担う存在であるのだ。

「はあ……にしても、本当にでけえな……ここ」

この国を治める王が優秀な魔術師を輩出するために建てたこの学園。少年はその校舎の荘厳さに圧倒されながらも、感心していた。

この王立レーンベルク魔術学園は入学費、授業費、その他諸々の経費が全て無料なのである。勿論、無料だからと言ってその内容を軽視するものではない。国が用意した優秀な教師と効率の良い授業過程で、この学園を卒業する者のほとんどが有名な企業や国の軍に就職したりする。これにより、この国がどれだけ魔術に力を注いでいるのか、わかると思う。

ただ、唯一懸念するとしたら、それは入学する難易度だろう。

この国には他にも似たような学園が幾つかあるものの、国中の人

間がこぞつて魔術学園に入学しようとする。そうになると、当然恐ろしく倍率が高くなる。

よって、この学園に入学する事、それ自体がエリートである事を現状は証明していた。

「まったく、良く入れたよな」

ひとりごちる少年が溜息を吐いている所から想像出来る通り、この少年も厳しい競争を勝ち抜いてきた人間だ。だから、世間から見れば少年もエリートの一人なのかもしれない。

しかし、少年自身がこの学園に入学出来た事に心から驚いていた。「はい。ちよつと良いかしら？」

声を掛けられて、少年は思考を中断する。

顔を上げれば、一際輝く紅色の長い髪が目映った。

「こんにちわ。それともこの時間帯はおはよう、かしら？ あなたも新入生よね？」

あなた？も？という事は、目の前の少女も新入生なのだろう。

少年は短く、ああ、と答えた。

「体育館つてさ、あつちで良かったっけ？」

少女はそう言って指で指し示してみる。

しかし、少女が指した方向に少年は違和感を覚え、懐から折り置かれた学園案内の資料を取り出した。

「……いや、違う。あつち」

少女は真逆の方向を指していた。なので、少年は正しい方向へ少女と同じように指を指した。

「あ、そっちか。私、その資料、なくしちゃったのよね。だから、迷ってたの。ありがとうね、教えてくれて」

「いや」

何でもない、と言った形で答える少年。

これで少女とのやり取りは終わりだと思い、学生服の上着の内ポケットへと資料をしまい込む。

しかし、少女に去る気配はなく、少年の目の前に片手を差し出し

てきた。

「私、レイラ・フレリレスって言うの。よろしくね」

差し出された手をしばらく見つめていた少年も、同じように手を差し出す。

「俺はサイガ・ムトウだ。よろしくな」

握手を交す。

少年は握手を交しながら、入学早々面白い人間と出会えたと感じた。

この広大な大陸には大きく分けて三つの国家がある。

北のドラゴン帝国、南西のイオン国、そして南東のアミリシア王国だ。

その中でも、ここ、アミリシア王国は過ごしやすい気候や豊かな自然に恵まれ、魔術によって生活の不備な部分を支える事で、快適な生活環境となっていた。

けれども、そんな中でも国や王が頭を悩ますほどの問題があった。その一つがこの国の男女比である。

女性の割合に比べて、男性の割合が極めて少なく、その比率は男女で二対八という極端な数字を割り出していた。

詳しい科学的根拠は不明だが、歴史的に見て、魔術の才能は女性の方に受け継がれやすいという事がわかっていた。そして、アミリシア王国人は体質的に優秀な魔術の才能を持った子供が生まれやすい。

つまり、女子が生まれる確率が極めて高いのだ。

その男女比はこのレーンベルク魔術学園も例外でなかった。

体育館に所狭しと並べられたパイプ椅子。そこに座る生徒の顔ぶれは女性がほとんどだ。

サイガは自由席となっている座席の後ろの方へと座っている。首

を動かして周りを見渡しても、女子の顔しか見られない。今年は特に男子の数が少ないかもしれない。

「凄まじいハーレム具合だな」

体育館の舞台に学園長というのが立ち、挨拶やら何やら話しているが、サイガの耳には入ってこない。サイガの頭はまた別の思考を呼び出す。

式直前で知り合った紅色の髪が特徴のレイラは、何処かに座っているのだろうか。目立つ髪色だから、見渡せば簡単に、目に入ると思っていたが見かけない。

せっかく出会えたのだから、一緒に式に出ようかとサイガは考えていたのだが、用事があるとかで先に体育館へ行ってしまったのだ。それにしても、フレリレスねえ……。まさか『四柱神』のフレリレスか？

およそ100年前、この大陸で大きな戦争があった。

北の帝国が、アミリシア王国に対して宣戦布告をし、進軍してきたのだ。帝国は三国の中でも最も強大で、その戦力はアミリシア王国では対処出来ない程であった。

結果的に言くと、アミリシアは隣国のイオン国と共同戦線を張ることにより、見事帝国軍を撃退。戦争は停戦という形で幕を閉じたのだ。

その戦争の時、魔術部隊を率いて、王国に多大なる貢献をしたのが四つの一族だった。東西南北と分かれて拠点を置くその四つの一族は互いに手を取り合い、王国を帝国軍の手から守った。

その功績が讃えられ、王国はその四つの一族に『四柱神』<sup>フォーリス</sup>の名を与えたのだ。

サイガの記憶が正しければ、その内の一つに「フレリレス」の名前があったはずだ。

『………続いては、レーンベルク魔術学園生徒会長による新入生へのご挨拶です』

気付けば、学園長の挨拶とやらは終わっていた。

壇上にゆつくりと姿を現すのは、透き通るような白銀の髪を真っ直ぐと伸ばした女子だ。

「初めまして、新入生の皆さん。私はこの学園の生徒会長を務めております、セレナ・ハートと申します」

隣国のイオン国製マイクを通して伝わるその声は、そよ風のように心地よく耳に入ってきた。

なので、自然と壇上に立って挨拶を続ける彼女の名前も頭に入ってきた訳である。

「やれやれ、今度は「ハート」か。やっぱり名門の学園には名門ばっかがいるようだな。」

周りを見ると、生徒は皆、生徒会長の話に聞き惚れている。

サイガにはわかる気がした。生徒会長であるセレナの言動は、こちらを惹きつけるような魅力が溢れていた。

だからこそ、生徒会長という職に就けたのだろう。

「……それでは改めまして。皆さん、ようこそレーンベルク魔術学園へ！」

気が付けば、セレナ生徒会長の挨拶は終わっていた。学園長の挨拶は何時間にも感じられたが、それに比べてあっという間だった。

『それでは最後に新入生総代による答辞です』

新入生総代、つまり入学試験でトップの成績を取った生徒という事だ。

多少の興味を持って、壇上に視線を向ける。

そこには見覚えのある姿があった。

一際輝く紅色の髪が、そこにはあった。

「皆様、初めまして。レイラ・フレリレスと申します」



## 始まりの終わり

「まさか、あんたが総代だったなんてな」

入学式が終わり、配布されている生徒証を受け取ったサイガは、人混みの中で紅色の髪を見つけると迷わず声を掛けた。

「あはは、驚いた？ 別に黙ってるつもりはなかったんだけど、どうせ後でわかるしな〜っと思って何も言わなかったのよね」

「ああ、驚いたさ。皆が真剣な眼差しで見てる中、俺一人目を見開いてたからな」

「うんうん、良く見えてた」

「……わかったのか？」

「えへへ、ウソウソ。冗談よ」

サイガは渡された生徒証を、失わないように一緒に渡された生徒手帳の中にした。した。

「あ〜でも緊張しちゃった〜！ 壇上に登ってみると、結構な人数居るのが見えるのね。直前まで余裕だったんだけど、登った途端震えちゃったわ」

「それでもちゃんとしたよ。さすがはトップの成績を取る程ではあるな」

「あっはは、止めてよね〜」

まったく顔を赤くしないで、照れてるように見せてるその姿から、レイラの余裕ぶりが窺える。サイガ自身が言った褒め言葉も、あながち大げさではないかもしれない。

「ところで、楽しみね〜クラス分け！ どんなクラスかしら？」

「レイラは優秀な生徒が集められたクラスにでも配属されるんじゃないのか？」

「それがそうでもないのよ。式直前に学園関係者……っっていうか、生徒会員から聞いたんだけどね、優秀な生徒と出来が悪い生徒を混ぜたクラス構成にするらしいの」

優秀な生徒と同じクラスにして、それを手本とさせる事で出来が悪い生徒に見習わせるといふ魂胆だろうか。

「なるほどね。……っと、さすがに混んでるな」

クラス分けが発表されている掲示板の前まで来たのだが、予想通り人混みが出来ていた。

待つとしたら時間が掛かる、しかし、割り込むには些か数が多すぎる。

「ねえ、サイガ。見てきてくれない？」

「……お前は会ってから一日も経ってない相手に、よくそんな無遠慮にものを頼めるよな」

「うーん……そうでもないわよ？　ただ、サイガだと気軽に頼み事が出来るような感じがしたの」

「それはそれでどうかと思うけど」

それでもサイガは頼み事を断らず、掲示板へと単身で近づいた。こういう混んでいる状態だと、いつまでも掲示板の前に張り付いている人間に、自然と苛立ちを憶えてしまうのは仕方のない事だろう。

人混みを無理矢理掻き分けて割り込むほど、サイガは凶々しくはない。せいぜい他人に押し出されないように、踏ん張るぐらいだ。

と、その時肩がぶつかった気がした。

とは言っても痛いという言うほどでもなかった。それでも、マナーとして一言謝っておくべきだろう。サイガはぶつけた肩の方へと首を回した。

「すまない、大丈夫か？」

「あ、いえ。大丈夫です！」

髪を三つ編みにした眼鏡を掛けた女の子だった。ちょっと地味な印象の子だ。サイガ達が掲示板の所にやってきた時から、人混みの中に居た気がする。

なかなか前へ進めてないようだ。どうやら引っ込み思案な性格らしい。

サイガは少し手助けをしてあげる事にした。前へ進むとき、少しだけその女子に空間を作っておける。

女子はサイガが空間を作った事に気付いたようで、恥ずかしそうに頭を下げた。

こうして掲示板の目前まで辿り着くまで、そんなに時間は掛からなかった。

名前順で並んでいるだろう、クラス分け表を上から順々に確かめる。

「あった。俺はD組か。それで……レイラは、と」

「あ……」

声が上がったので、顔を上げてみると、三つ編みの女子がクラス表を見て驚いたように目を見開いている。そして、サイガの視線に気付くと、顔を赤くしながら、そそくさと行ってしまった。

かなりの恥ずかしがり屋のようだ。

それ以上は気にせず、サイガはレイラの名前を探し出す。

レイラ、である。名前順に見れば、表の下の方にあるだろうと、サイガは視線を一気に下げた。

「お、これは」

面白そうに、サイガは笑みを浮かべると、すぐに人混みから抜け出してきた。

「どうだった？」

期待に満ちた瞳で見つめてくるレイラに、サイガはにやりと笑いながら言った。

「D組、俺と同じだ」

「やったー！」

サイガが言い終わると同時に、跳ね上がって喜びを表現するレイラ。

サイガは少しばかり呆気に取られた表情で見ている。

「やっぱりサイガと知り合って良かった！ 知り合いと同じクラスだと、気が楽だわ！」

「レイラなら誰でも馴染めそうだけだな」

「それもそうだけど……やっぱり違うのよね。これから会う人達ってさ、私がトップの成績で入学したって事を知ってるでしょ？でも、サイガはそれを知る前から知り合った人だから、そこら辺が違うんだよね」

レイラの言っている事はわからないでもないが、所詮ギリギリのラインでこの学園に入学出来たサイガからしてみれば、同感する事などおこがましく思えた。

「という事で、改めてよろしくね、サイガ」

「おう。こちらこそ」

それでも、目の前の優等生とより親しくなることには、何も疑問には感じなかった。

「へいへい、そこのお嬢さん！」

「そこだよ、その可愛いお嬢さん！」

喧しい二つの声を掛けられ、レイラは振り向いた。サイガもそこから視線を向ける。

「君、新人生でしょ？ オレは二年のマッグって言うんだけど」

「あ、オレはローテルね」

見た目は至って平凡そうな二人組の男、だが、その軽薄そうな言動からサイガは二人組の性格を容易に想像出来た。

「俺たち実はさ、ある委員会に所属してるもんなんだけど……どう、話でも聞いていかない？」

「もし入学してわからない事とかあったりするなら、何でも相談に乗るよ」

「……サイガ、これは新手のナンパかしら？」

「いや、俺に訊くなよ」

サイガとしても呆れていた。

二人組の男の下心というのが、露骨過ぎるのだ。というより、全面に押し出している感じすらある。隠す気もないといった感じだ。

レイラは二人の方へ振り向かない。無視に徹するようだ。

「委員会の詳細も本部で話すし、どうだい？」

「時間はそんなに取らないからさ」

しかも、これも露骨にサイガの事を無視している。ここまでわかりやすいと、逆に怒りが湧いてこない。呆れるだけだ。

しかし、それが何度も続くとなると、話は別だ。

「ねえねえ」

「良いだろ？」

無視し続けたレイラだが、さすがにそれ以上は無理だったようだ。

「しつこいわねえ」。あっち行つてくれないかしら？」

レイラの限界がそろそろ近づいてきた頃だった。

「その二人、何をしている？」

すつ……と刺すような声が、二人組を凍えさせた。

レイラとサイガが視線を向けると、そこには長い黒髪をストレートに伸ばした女子生徒が居た。

両手に指ぬきの黒いグローブがはめられている。射貫くような鋭い目つきだ。刃物かと思わせる視線は、身が縮むような寒気を感じる。

だが、何よりも特徴的なのが彼女の片側の肩に担がれている物だった。

「……また、お前らか。マグ・ルナード、ローテル・シリア」

初めは黒い線にしか見えなかったが、近づいて来て、はっきりとサイガは視認した。

それは一本の黒い槍だ。

黒い槍を持つ黒髪の女性の全体像を捉えた時、サイガは目を見開いた。

「委員会や部活への勧誘はまだ禁止されているという事を知っているだろう。知らないとは言わせないぞ、二人共」

先手となる言葉を打たれて、二人組は口を開けなくなる。

「はあ……アキホのやつももつと厳しく言ってもらわないと困るな。とにかく二人共、これ以上の行為は風紀委員の摘発対象だ。以後、慎むように」

はい、と情けない声を出しながら、二人組はそそくさと去ってしまった。

二人組がいなくなったのを見計らったかのように、黒髪の女性はサイガ達に振り向いた。

「すまないな、二人共。私は風紀委員の委員長を務めているカナメ・モリヤという」

「助けていただいてありがとうございます。私はレイラ・フレリレスって言います」

「そうか……君が今年の総代か」

「はい！ それにしても、カナメ先輩ってとても長い槍をお使いになるんですね」

レイラは先ほどのカナメの威圧感を見たはずだ。それでも物怖じしないのは、剛胆な性格と言えよう。女性に対する褒め言葉ではないかもしれないが。

「ああ。幼い時からこれを使ってきたからな」

「そうなんですか！ 私って武器とか使わないんで、カナメ先輩みたいな、ちよつと憧れてるんです」

「そうか。やはりフレリレス家は魔術一筋のようだな」

「あ、わかつちやいました？」

「君の成績と名前を照らし合わせれば、誰でも容易に想像出来ると思っぞ」

照れ隠しに笑うレイラを、横目に見ながらサイガも内心笑っていた。レイラは正直なタイプで、しかも好奇心旺盛なようだ、と。

「君の名前を訊いてなかったな。君の名は？」

視線はサイガに向けられた。

サイガは一瞬迷ったが、ここで黙っているのも不自然なことなの

で、素直に答えることにした。

「サイガ・ムトウです」

「……何？」

カナメは訝しむように、眉間に皺を寄せた。

それは聞き慣れない名前を聞いたからか、それとも聞き覚えのある名前を聞いたからか。

後者である事を、サイガはわかっていた。

カナメの予想通りの反応に、サイガは内心笑みを浮かべる。

「ところで、先輩はいつまでもこんな所に居てよろしいのですか？  
巡回の途中なのでは？」

サイガの言葉に、カナメは考えを中断せざるを得なくなった。

「あ……ああ、そうだな。二人共、もし困った事があったらいつでも風紀委員に連絡してくれ。出来る限りの範囲で、手助けしよう」

「ありがとうございます！」「はい」

レイラとサイガが同時に答えたのを見て、カナメは歩き出した。  
しかし、一旦歩むのを止めると、振り返ってサイガを見た。

「サイガとやら……生まれは何処だ？」

「生まれ、ですか」

サイガは問われた事に、疑問に思っているような顔を装って、

「アミリシアです」

嘘を吐いた。

「……そうか。それでは失礼する。帰りには気をつけるよ」

踵を返して、去っていく。

その背中を見つめながら、サイガは装っていた表情を解き、真剣な眼差しへと戻した。

学園内に存在する施設は多々ある。

図書館や実練施設、食堂。実験棟や工作棟なんてものもある。

だが、学園寮だけではない。学園内はあくまで教育に集中するための建物しか、建設されていないのだ。

男子寮と女子寮、それぞれは学園の外にある。

外と言っても歩いて十分程度の場所だ。最速なら五分を切れる。

サイガは男子寮で暮らす事にした。適当な部屋を借りても良かったが、何せこの学園寮、食費を除いた生活費を一切賄<sup>まかな</sup>ってくれるのだ。

入学費、授業費と続いて学園関係の施設まで無料で利用出来る。これを利用しない手はない。

「ふう〜」

男子寮の一角、正確には二二五室にサイガは居た。

制服をだらしなく緩めて、息を吐きながらベットへ倒れ込んだ。

「さすがに危なかった……いや、でもあれだと俺の正体がわかるのも時間の問題だな」

天井を見ながら、今日一日を思い出す。

「にしても、色々な人に出会ったな。初日からこれだと、明日からが楽しみだ」

ネクタイを解き、放り投げる。

「カナメ・モリヤか……そういえば、アキホの名前も言ってたな。

そうになると、やっぱり全員この辺に来ている事は間違いないか」

立ち上がり、窓へと近づぐ。

日が暮れ始めている外の景色を見ながら、サイガはにやりと笑った。

「楽しくなりそうだ……本当に楽しくなりそうだ」

人の悪そうな笑みを浮かべた顔は、ぼんやりとガラスに映っていた。

## 広がる輪

広すぎるというのも、難点である。

朝、サイガは教室へ向かうために学園内を歩いていた。しかし、その余りにも広すぎるキャンパスのせいで、片手に地図を持ちながらという情けない格好になっている。

一年の教室は新入生に考慮してか、校門に入って目の前の校舎にある。

あるのだが……

校門入って目の前にある校舎ってのが、四つもあるってのはおかしいだろ……。

サイガは入学案内の資料を、今日も懐に入れておいて良かったと安心する。

もしなかったら、ここの生徒か職員に場所を尋ねるという恥ずかしい事になっていただろう。

一年の教室が集められた、通称一年棟に足を踏み入れる。持っていた資料を上着内へとしまい込む。

さすがにどの教室が何組かつてのまでは書かれないよな。こればかりは地道に探さねえと。かあゝ、面倒くせえ。

横長なこの校舎は三階建てだ。上から一つ一つ教室を見ていくのは骨が折れる。

しかし、実際はそこまで苦労しなかった。

というのも、サイガはD組なので、上から順番だとすると一番上が妥当かなと予想し上った所、見事に予想が的中したのだ。

「サイガ！」

教室に入るなり、元気の良い声に視線を上げる。

そこには紅色の髪を浮かせて、手を振るレイラの姿があった。その隣には見慣れない女の子の姿もある。

一つ長い机に椅子を設置して、皆で共有するタイプの教室は、ど

うやら自由席のようだ。

サイガはレイラの隣へ行こうとして、ふと気付いた。黒板に近い、前方の席に見覚えのある女子がいた。確か、掲示板の前で肩がぶつかった地味な印象の子だ。

三つ編みの女の子はサイガと目が合うと、何故か申し訳なさそうな感じで頭を下げた。

声を掛けようと考えたが、レイラがしきりに手を振っているので、そちらを優先した。

「おはよう」

「おつはよう、サイガ！ 朝は遅いのね？」

「朝は苦手だ。ところで、そちらのお隣さんは？」

「ああ、紹介するね。今朝知り合ったミシェル・ホワイト。ミシェル、こっちは昨日知り合ったサイガよ」

「よろしく、サイガ」

「おう、よろしく」

一言で言うならクールな印象だ。短く切られた、淡い光を放つ水色の髪、感情が読めない、細い目つき。何処か知的な雰囲気を出している。

「二人はどうやって知り合ったんだ？」

サイガは興味本位でレイラに訊いてみる。

「聞きたい聞きたい？」

いかにも聞いて欲しいと言った表情で、サイガを見てくるレイラ。その後ろで、何故かミシェルが溜息を吐いたのを見て、サイガは何となく予想が出来てしまった。

「いや、結構だ」

「ちよつと！ 何だよ！ 訊いてきたのはそつちでしょ！？」

「いや……もう何となく読めてきたからいいわ」

「え、そんなこと言わないでー！」

「いや……だから……」

「ねえ～えー！」

「わかったわかった！ 当ててやるよ」

へっ？ と気の抜けたような顔をしているレイラに向かって、サイガは己の予想を話してみる。

「レイラが迷子になっている所をミシエルが助けた。……違つか？」  
「な、な、な、な」

顔を強ばらせて、壊れたレコードのように何度も同じ言葉を繰り返したレイラは、

「何でわかったの!？」  
大音量で叫んだ。

おかげで教室中の注目を浴びている。ただでさえ、目の前の紅髪少女は総代という形で目立っているのに。

「っせえな、そんなに叫ぶな。レイラの事だ、どうせまた資料を忘れたんだろ？」

「何、で……」  
硬直しているレイラを放っておいて、サイガはミシエルに視線を向ける。

「この先、お互い苦労しそうになるわね」

ミシエルはレイラを一瞥してから、眉尻を下げて笑って見せた。  
対してサイガも笑みを浮かべる。

「まったくだ」  
そこで、予鈴の鐘が鳴った。  
朝のドタバタはここで終わったのだ。

「はい、皆さん座ってちよーだい」

やる気のなさそうな声と共に、教室の扉が開かれる。

入ってきたのは見た目からしてだらけた感じの男性と、皺一つ無いスーツをきちっと着こなした真面目そうな女性だ。

「欠席している人とかいないねえ？ はい、じゃあさっさと説明

始めるね」

男はチヨークを取り出すと、黒板に名前を書き出した。

「僕の名前はエミス・ユーロ。このクラスの担任をやらせてもらうね。それで隣に居るのが……」

続けようとした矢先、女性教師がエミスの持っていたチヨークを奪い取るようにして、黒板に名前を書き出した。

「副担任を務めさせていただきます。マリー・オルターです。一年間、皆さんを厳しく指導させてもらいます。どうかよろしくお願いします」

厳しく、その言葉が緊張となって伝わる。

しかし、マリーが一礼で下げた顔を、ゆっくりと上げるとそこには笑顔があった。

マリーの笑顔を見て、緊張が一気にほぐれる。そして拍手が湧き起こった。

（厳しそうね〜）

（ああ。それに生徒の感情を上手く理解出来ているようだな。なかなか手強そうだな）

（私、ああいう人苦手……）

（でしようね）

マリーに送られる拍手の中、完全に取り残されたエミスは、困った様に頭を掻きながら、

「えっ……と、良いかな？」

拍手が止んだのを見て、ほっと一安心するように息を吐いたエミスは続ける。

「まあ、担任と言ってほとんど形だけなんだよね。この学校、生徒自主性を重んじているから、ホームルームとかも出席自由だし。それに、僕らにもそれぞれ専門にしている教科があるから、どんな科目でも助けになれるとは限らない。ちなみに僕は近接系統の魔術や格闘を、彼女は中から遠距離における魔術を専門としている」

サイガの隣で、げえっ！ と声上がる。

見るとレイラが嫌そうな顔をしている。

サイガは推測してみる。

先ほどレイラはマリーの事を苦手と言っていた。そして、フレリレス家は魔術に、しかも中・遠距離に特化した魔術に秀でた一族だ。んな、露骨に嫌がなくなってもいいだろうに……。

「でも、授業以外にも、例えば生活関係おける悩みとかあったらいつでも相談して欲しいんだ。これでも一応人生の先輩だからね。どんな些細なことでも構わない。話したい事があったら、この建物の一階にある職員室に来て欲しい。僕やマリー先生がいつでも話し相手になるから」

そこまで言つと、エミスは片手を高く挙げた。

「何か質問はあるかい？」

しかし、無音。誰も手を挙げようとしなかった。

「ないね？ そんじゃあ、これからの予定を伝えた後、みんなの自己紹介タイムといこうか」

(自己紹介か……なんか緊張するわね)

(お前はしないだろ。全一年生の前で答辞述べたお前が)

(それとこれとは違うわよ)

それでも楽しそうな笑みを浮かべるレイラを見ると、その余裕振りが窺えた。

今後の予定の説明が終わると、生徒達の自己紹介が始まった。

自己紹介は名前順、つまりは学籍番号順だ。

そうなるとサイガは自然と序盤の方になる。

黒板の前、皆に見える位置で行う自己紹介は、少しばかり緊張する。

「サイガ・ムトウです。このような名門学校に入学出来た事を未だ不思議に思っています」

クスクスと笑いが起きる。こういう場で、今のような冗談はお決まりだろうとサイガは考えていた。

「出来損ないながら、一生懸命勉学に励まさせていただきます。よろしく願います」

湧き起こる拍手。中には数が少ない男子に対する興味の視線があったりしたが、サイガは特に気にすることなく、自分の席へと戻った。

「サイガもそこまで緊張しなかったじゃない」

「まあな。いやでもまったくって訳でもねえぞ。平静を装ってただけだ」

そして、自己紹介は次の生徒へ。

これはサイガが驚いたことだが、サイガの次の番号に当たる生徒は男子だった。

「みなさん、こんちわ！ 俺の名前はザック・ウェイダーです！ 魔術は攻撃系統が得意です！ これから一年間仲良くやっていきましょう、よろしく願います！」

サイガと比べて、元気が良い男子だ。サイガ自身は喧しいと感じたが。

金髪と黒髪が混ざった何とも特徴的な髪の男子だ。

しかし、見渡して見ても他の男子生徒は見当たらない。どうやら、このクラスの男子は二人しかいないらしい。

「今自己紹介してもらった二人共、男子は君達しかいないから、頑張ってる」

エミスから軽い口調で言われて、サイガは思わずザックの方を見た。それは向こうも同じだったらしく、お互い目が合ってしまった。

「よろしくな、サイガ」

「ああ、よろしく」

机越しに伸ばされた手をサイガはしっかりと握った。

何となくだが、サイガはザックと仲良くやっていけそうな気がした。

「じゃあ、お次はセンさんかな」

「あ、はい！」

立ち上がったのは前方の席に座っていた三つ編みの少女だ。

「え、あ、あの。えっと……その、セン・ヒカゲと申しますっ！  
えとっ、その、よ……よろしくお願ひします！」

もの凄く小さな声だった。本人は頑張つて声を張っているのだからけど、正直後方の席に座っている生徒に聞こえるかどうか不安だ。  
「えっと……センさん？ もう少し声を大きく出来るかな？」

エミスも困つた様に苦笑いを浮かべている。

「す、すみません！」

九十度以上の角度で腰を曲げて、頭を下げるセン。

これには教室中に居る皆が苦笑いだ。

「ま、まあいいや。それじゃあ、センさんに拍手」

エミスの言葉で拍手が起こる。それに対して、センは顔を真っ赤にしながら足早に自分の座っていた場所へと戻った。

「……ふくん、センか」

「なに、サイガはあの子に興味があるの？」

レイラに訊かれて、一瞬誤魔化そうと考えたが、サイガは正直に言うことにした。

「いや、実はあの子とも顔見知りだな。つうーか、掲示板前に居たの覚えてない？」

「私、後ろの方に居たし」

「あーはいはい、クラス分けの確認を俺に任せて、お一人くつろいでましたねー」

「そんな嫌味たらつしく言わなくなつていいじゃない」

「あんな、あの人混み結構きつかつたんだぞ。まあ、ともかく、そこでセンの事を見かけたんだよ」

「あ、成る程」

レイラは納得したのか、教壇の方へと視線を戻した。

実際、センとは顔見知りなんてものじゃない。

お互いがお互いの事を知っている。まだ、センはサイガの事に気付いてないようだ。

けれど、サイガが自己紹介をした時は、驚いたような表情をしていた。

それにしても、カナメにアキホにセン。こりゃ「全員」が揃うのはそんなに遅くないな。

「……ミシエル・ホワイトです。特に得意な魔術はありませんが、何か特出した技術を得たいと思っています。よろしくお願いします」  
気付けばミシエルの自己紹介が終わっていた。抑揚のないクールな自己紹介だった。

次々と生徒の自己紹介が終わっていき、そろそろ終盤へと近づいていた。

「もしかしてさ……私が最後？」

レイラがふと尋ねてくる。

名前順で行われる自己紹介だ。そこから考えれば、「レ」イラが後の方というのは想像出来る話だ。

「それはそうだろ。見た感じ、ほとんど終わってるし、お前がラストだな」

「私が締め！？ 何か嫌だわ」

「いいじゃない、レイラ。あなたは総代なんですよ？ 良い感じにトリを飾ってくれると思うけど」

「むう、みんなしてからかわないよね。まったくローズさんとかローストチキンさんとか居ないのかしら」

「……美味そうな生徒だな」

頬を膨らませて怒る仕草をするレイラに、半眼でツッコむサイガ。そんな顔をした所で順番は変わらない。

「それじゃあ、最後にレイラ・フレリレスさん、よろしく」

エミスも最後が誰であるかわかってか、期待を込めた言い方だ。レイラは一つ深く呼吸をしてから、立ち上がった。

教室が異様な静寂に包まれている。やはり皆が期待しているようだ。

教壇に立ったレイラは、入学式で壇上に上がったときのような、

堂々とした笑みを浮かべた。

「みんな知ってると思うけど、レイラ・フレリレスです。総代とか成績トップとか色々言われてるけど、私自身、まだまだ未熟だと思ってます。だから、ここにいるみんなと一緒に、たくさん事を学べたら良いなって思ってます。一年間とは言わず、ここで送る三年間、そして卒業してからも、お互いを助け合っていける仲間になりたいと考えてます。よろしく願います！」

言い終えた後の一瞬の静寂。

しかし、ふわっと拍手が湧き起こった。

生徒の何人かは陶醉したかのような表情で、レイラを見つめている。

エミス達教師も満足そうに微笑んでいる。

サイガはレイラの魅力を改めて知った気がした。

その日一日は、学園の各種施設の案内で終わった。

明日から本格的に授業開始だ。

「ねえねえ、親睦会でもやりましょうよ」

帰り、レイラの提案で四人集まって、軽い食事をする事になった。

四人というのはレイラ、サイガ、ミシエル、ザックだ。

サイガはセンに声でも掛けようかと思ったが、すでに帰った後だった。

レイラの人柄でもっと人数を多く集めてくるかと思っていたが、本人曰く、大人数は店にも迷惑だし、多すぎるとの事。

「みんなはどうして、ここに入学したの？」

お店、学生でも入れる軽い料理店に四人は席に座っていた。サイガとレイラ、ミシエルとザックという組み合わせで向かい合っている。

座るなり、レイラは身を乗り出して周りに問い掛けていた。

「んー？ 俺はやっぱり魔術をもっと上手く使えるようになりたいからだな」

一番手に答えたのはザックだ。

「ザックって攻撃魔術が得意なんですよ？」

「覚えてたのか！？ まー、親父がさ、軍の警備隊の隊長をやつてたな。小っちゃい時から、鍛えられてたよ。だから、親父と一緒に警備隊になれたらいいなーって考えてる」

「警備隊長って凄いわね。何かとても厳しそうなイメージ」

「厳しいぜー。何か悪い事したら、すぐに鉄拳制裁だからなー。痛いってえんだ、あれが。子供に対する仕打ちじゃねえって、今でも思うよ」

「でも、今ではその人の背中を追いかけてるのね」

「まあね。やっぱり血が繋がってるんだよなーって感じてるよ。ミシエルはどうなの？」

「私？ 私は家族のためかな」

「家族？」

「うん。私の家族ね、私含めて九人姉弟なの」

「きゅ、九人！？」

ザックが驚愕の声を上げる。レイラもサイガも驚いていた。

「うん。女が四人、男が五人。一番上が私」

「なるほど。つまり、支えていこうって考えてるのか」

「そういうこと。両親だけの収入だときついよ。だから、私が王国軍とかに入れば、楽をさせてあげられるかなって」

「親孝行なのね」

「それで、レイラは……って、聞くまでもないわね」

「あはは、まあね。私は一族の決まりって感じかな。実際、私自身も強くなりたいってのもあるし」

「将来の目標とかはないのか？」

「目標？ 今の所はないわね。これから見つけていくつもり」

「なるほど」

サイガは相槌を打っておく。

「それで最後にサイガは？」

「俺か……」

しばらく虚空を見つめて考える。

サイガにはこの学園に入学した明確な目標はない。将来、どんな職に就きたいとか考えていなかった。

この学園に入学した目的はあるのだが。

「俺も探してる途中かな。寧ろ見つけるためと言っていい」

無論、その目的を喋る訳にはいかない。無難な解答をしておく。

「見つけるため？」

「何をしたいのか。何を目指したいのか。ある意味自分探しだな。

それが入学の理由」

「ふくん。じゃあ、私と似たようなものか」

「そうだな」

運ばれてきた飲み物を口に含みながら、サイガは考える。

将来の夢ってやつか。

正直、考えた事がなかった。考える余裕がなかったというべきか。ある目的のためにずっと他のことを考えないでいた。

もし、目的が果たせたら、ゆっくりと考えてみるかな。

こうして、親睦会は日が暮れるまで続けられた。



## 忍び寄るざわつき

朝は苦手だ、とサイガは思う。

どれほど体を鍛えようが、体質的なものだから仕方ない……と思っ  
ている。

それでも起きなければならぬ。遅刻してしまうからだ。

起き上がり、頭を左右に振ることで、眠気を払う。カーテンを開  
けて、体全体で日光を受ける。これがサイガの目を覚ますやり方だ。  
部屋の角に置いてある、隣国のイオン国製冷蔵庫を開ける。

中に入っている食材から、適当な物を選んで、朝食にする。と言  
っても、火を使ったり、水を使ったりするのが面倒なので、いつもは  
果物の丸かじりだ。

簡単な食事を済ませて、制服に着替える。そして、いざ出掛けよ  
うとしたときだ。

コンコンツという音を立てて、扉がノックされる。

「？ はい」

扉を開けてみると、ザックが扉先に居た。

「よ、おはよう。一緒に行こうぜ」

どうやら迎えに来てくれたらしい。男に迎えられるなんて珍しい  
事もあるもんだ、とサイガは思った。

「ああ、わかった。ちよつと待て」

最後の身支度を終えて、部屋を出た。

「それにしても、朝からお迎えに来るとは、どういっつもりだ？」

「別に？ 朝ぐらい一緒に登校しても良いじゃん」

ちよつと疑ってしまうのは、ザックが男を迎えるような性格に見  
えなかったからだ。

「お前ってどっちかって言うと、女子と一緒にの方が好きそうな感じ  
なんだが」

「まあ否定はしないけどな。でも、まだ初日だぜ？ そこまで狙っ

てないさ」

「それもそうか」

寮を出て、学園へと向かう。この時間なら授業開始三十分以上前に、教室へ入れるだろう。

「ザックは朝早い方なのか？」

「いや、実はそうでもないんだよねー。今日が特別なだけ」

「……？ にしても、俺を迎えに来るくらい余裕だったじゃねえか」

「だから、今朝はたまたまだよ。学校始まってすぐってさ、何か緊張して目が覚めない？」

「そうか？」

どうにも怪しい。ザックは何か企んでいるような気がする。

「ザックがそういうなら、別に良いけどな」

試しにサイガはどうでも良いと言った感じの言葉を喋ってみる。

横目でザックの事を見る。サイガはザックがにやりと口の端を吊り上げるように笑ったのを見逃さなかった。

やっぱり企んでやがる。

実際、サイガは本気でどうでもいいので、放っておくことにする。

「この辺りから生徒の数が増えてくるな」

歩く通りにはちらちらと同じ制服を着ている学生が見られる。

「うーむ」

ザックは何かを探るように、首を振って生徒を一人一人見ていた。

「……何やってんだ？」

「あ、いや、別に？ 何でもないぜ」

「この野郎、そろそろ白状しろ」

それでも白を切るザック。サイガは仕方なく、好きにさせておくことにする。

「おつかしいな……この時間帯だったと思うんだけど」

隣で呟いているザックの独り言を、聞き流しながらサイガは歩く。

学園がそろそろ見えてきた頃、サイガの視界に一際輝く光が入った。

「あれは……」

「ううおおおお！」

ザックが唸っている。どうやら、アレが目的だったようだ。

学園に向かう生徒の中、光るような白銀の長い髪の生徒が一人、悠然と歩いていた。

セレナ・ハート、レーンベルク魔術学園の生徒会長だ。入学式の時、新入生の前で挨拶をしたのは記憶に新しい。

「なるほど……お前はあれが見たかったのか」

「おうよ。セレナ様はいつもこの時間に登校しているって情報を手に入れてな！ あのお方の麗姿を拝見出来ただけで、もう今日は満足だ！」

「そのために早起きか。根性あるな、お前」

呆れながらも、サイガはセレナ生徒会長の後ろ姿を目で追っていた。

周りの注目を集めながらも、堂々とした姿勢で歩く姿は、確かに魅力を感じる部分がある。

少しわかるかもな、気持ちか。

「サイガだつて、セレナ様の事ずっと見てるじゃん」

「そりゃ見とれはするけどよ。お前みたいに早起きするまでの根性はないつての」

「かあ〜！ それじゃあまだまだな！」

「何がだよ」

「お前さ、あのお方とお近づきになりたいって思わない？」

「お前、まさか……」

「そうさ！ 俺はセレナ様にお近づきになりたいのさ！ いいか？ セレナ様は来年には卒業してしまう。残された時間は一年しかないのさ。だとするなら、その一年間を使って、俺は高嶺の花に手を伸ばそうと足掻いてみせる！」

「……大した根性だよ。呆れるぜ」

「サイガはさあ、セレナ様と一度で良いからお話をしてみたいとか、

思わないの？」

「あるな、それは」

別の意味も含めて。

「だったら、それに情熱を燃やそうぜ。それが青春だ」

「わかる気がするが、俺はそこまでじゃないかな」

「ん？ じゃあなんだ。お前はセレナ様みたいなのはタイプじゃないのか？」

「同じ事を言うが、そこまでじゃない。タイプを言うなら、会長さんは取っ付きにくい。俺はもっと親しみやすい方がいいな」

「それって……レイラとか？」

「は？」

まさかの名前が出てきて、しばらく思考が停止する。

しかし、その停止時間はすぐに再生された。

「私になんだったって？」

振り向けば、レイラが立っていた。

今話していた話題の事を気にすると、少し気まずい。

「な〜んか、私の事を話してたでしょ」

ザックが面白そうな顔をしている。第三者の立場ならこれほど面白い現場はないだろうよ、とサイガは思いながら、妥当な形で誤魔化すことにした。

「いや悪いな。生徒会長とレイラの事を比べてたんだ」

「ええ！？ ちょっと、私なんかをあの人と比較しないでよね！」

あの人は、その……とつても凄い人なんだから」

「やつぱりそれは『四柱神』の間でも、一目置かれてるようなもんなのか？」

「……………その『四柱神』って言うのやめてくれる？ あんまり好きじゃないの」

その時のレイラの表情は、複雑だった。

悲しくも見えれば、辛そうにも見える。そして、サイガには怒っているようにも感じられた。

レイラもこんな表情をするのか、とサイガはレイラに対する認識を改める。

「……悪い。気分を害したんなら、謝る」

「ううん。サイガは知らなかったんだもの。仕方ないわ。でも、次から気をつけてね?」

「ああ、わかった」

事情は知らないが、レイラが嫌がっているのだから、これ以上の話題に触れるのはよそう。

「お前はいつもこの時間なのか?」

「うん、そうね。サイガは、今日はやっぱり早めの方?」

「まあな。珍しく早く起きられたのと、ザックが迎えに来たってのもある」

「そっか。でも、何で?」

「ザックは生徒会長見たさに早起きしたんだとよ」

「あらあら、それは何というか、ご苦労様ね」

「……お前ら、仲良いな」

いつの間にか、レイラとサイガが隣同士で、ザックはサイガ達の背後で半眼になっていた。

「私達って気が合うのかもね」

「かもな」

「……やっぱり、仲良いな」

初春の光を受けながら、三人の生徒は、校門を潜ったのだった。

さすがは名門学園だと、サイガは思った。

今日から本格的に授業開始である。名門の魔術学園という事である程度の下準備をして臨んだのだが、予想以上にきつかった。

サイガは実技が得意である。なので、きついと感じたのは講義の方だ。

今受けているのは、魔術の構成に関する授業。

魔術とは何か？ から始まり、どのような構築が理想かとか、それぞれの属性に分けた構成式を習っている。

言ってしまうえば、基本中の基本だ。

だが、それは体が感じている事であって、頭は違う。

「属性によって使用する魔力量が違う事は、皆さん感じたことあると思います。それは属性によって、構築しやすい式が違うからです」  
講義をしているのは、レイラの苦手なマリーだ。

滑らか動きで板書していくマリーの講義はわかりやすいものだ。

「式によって最低魔力使用量が決まる。これによって魔力使用量は属性で差が出る事が理解出来るかと思います。基本属性ならば、火、水、風、地の順番で使用量が小さくなります。

光や闇といった属性は使う魔術によってかなり差が出ます。なので、この二つはやはり例外として考えて下さい」

光と闇は基本属性に含まれてはいない。基本属性は得意不得意が分かれるものの、一般的に扱うことが可能な属性だ。しかし、この二つの属性は違う。扱えるか扱えないかは、才能によって分かれる。

「使用する魔術が二次属性だと、さらに使用量が大きくなります。

それは二つの属性を組み合わせることで、より複雑な構成式を構築するための魔力を必要とするからです……センさん」

「ははは、はい！」

突如、名前を呼ばれて慌てふためくセン。声が裏返っていた。

「二次属性について、説明して下さい」

「は、はい。えと……二次属性というのは……基本属性同士を、組み合わせることで生まれる、より進化した属性、です」

「よろしい」

二次属性 例えば、水と地を合わせれば植物を茂らせ

ることが可能だ。同種の属性同士でも組み合わせは可能で、例えば、

火の属性同士を組み合わせると、焰となる。

「皆さんの中には、この構成式の構築を得意とする人がいるかも知れませんが、しかしさらにその中には、構築は出来るが、魔術を発現させる事が出来ない人がいると思います」

「ミシエルって、そんなタイプじゃない？」

小声だが、レイラは聞こえるように隣のミシエルへ話掛けた。

「え？ ええ、まあね。私、あまり魔力を多く持った体じゃなかったから、対抗するように式の構築は結構勉強してきたの」

「私は逆だったわ。自分の持つてる魔力に合った魔術を扱えるように、勉強してきたわ」

「レイラさん、私語は慎んで下さい」

マリーに注意されて、レイラは誤魔化すように笑いながら、頭を下げた。

やはり何処か苦手そうだ。

「それではレイラさんに質問します」

「げ」

嫌そうな顔をするレイラを放っておいて、マリーは進める。

「属性によって使用する魔力量が違うのは今改めて習いました。それが式によって説明されている事も。では、どうして 火、水、風、地の順番なのでしょう？ 具体的に説明して下さい」

「え、ぐ、具体的？」

困った様に視線を宙に巡らせる。

しかし、その視線は次第にサイガやミシエルの方へと注がれた。

（いや、俺もわかんねえ）

（ふふ、頑張つて）

「っ〜！ え……つと、やっぱり式の形状、かな？」

マリーは黙っている。暗に続けると言ってるようだ。

「火が一番複雑で、地が一番簡素な式だから……です」

「……三十点」

マリーの厳しい評価にガクツとうな垂れるレイラ。

サイガも、その何処が具体的なんだ、と内心ツツコミを入れている。

「言ってることは正しいですが、具体性が伴っていません。……自然界に注目した時、この世界でもっとも多いのは大地という土でしょう。土は地であり、魔術として扱う場合も、形あるものとしてとても式を構築しやすいのです。しかし、火は違います。そもそも火は自然か人の手によって起こさなければ、存在するものではありません。火を魔術として呼び出す際、まず可燃性のあるもの、つまり火種を想像する事から始まります。次に、火を起こすための適切な温度。最後に燃え続けるための、空気を送る必要があります。火を発現するには、三度の手順を踏まえなければならぬということです」

わかりやすいように、マリーは黒板に簡略化した火の絵を描く。

「これが火の構成式が複雑な理由です。ここまで答えていたら、八割を与えてました」

(無理だっの！)

先ほど注意されたせい、極小という小さな声で叫ぶように、レイラは吐き捨てた。

隣にいるサイガの耳には届いたので、サイガは頷いて同意しておく。

ミシエルは苦笑いを浮かべている。

ここまでの授業内容をサイガは理解出来た。

いや、逆に言うならこの程度なら理解出来るだ。

この内容の応用で「魔術式の構築」という科目があるのだが、複雑な式の組み立てに、魔力値といった数字を当てはめて、計算するという数学要素が濃い科目なのだ。

サイガにとって、それが今年の鬼門であった。

ちなみにその科目の担当教師はマリーである。

「……今日はここまでしておきましょう」

マリーの一言で、教室中にリラックスした空気が流れ出した。

「宿題を出します」

しかし、次の一言で一気に固まった。

「ああ、もう早速疲れるわ〜！」

昼休み、学園内にある学生食堂に、いつものと言えるようになったメンバー四人が集まって昼食を取っていた。

食事早々、レイラが不満を吐き散らすように、叫んだ。

「もうダメ。ダメ、ダメ、ダメ！ マリー先生の授業は神経すり減るわ、ホント」

「そうかしら、私は普通に受けてれば、わかりやすい授業だと思うけど」

「それはミシエルだけでしょ？ ねえ、サイガ達はどう思う？」

「レイラと同意見。難しいし、集中が乱れるのを一瞬も許さないからきつい」

「それは俺も同じだな。まあ、俺はマリー先生の姿を見るだけで眼福だけど」

「……ザック、お前の好みが見えてきたぜ。お前、年上好きだろ？」

「必要ならば、年上の魅力を小一時間語るが？」

「「結構」「」」

三人に異口同音で言われザックは、そうですか、と気落ちする。

「それも何なの！？ あの宿題の量は！？ 初日に出すとは思えない量だわ」

レイラの意見に、サイガはまったく同意見だった。

「ああ、有り得ないな。これが名門かと思っていたが、レイラを見ると、実際そうでもないらしいな」

「私を基準にしないでよね。名門とか関係なしで、あれは異常よ」

「なあ、もし宿題を忘れたらどうなるんだ？」

サイガの疑問には、黙々とサラダを食べていたミシエルが答えた。

「多分、体罰じゃないかしら？」

「あー、それだったら俺は受けてみたいかも」

「ザック。頼むから、話を脱線するような発言しないでくれ」

ザックはどうやら年上好きのDMらしい。

サイガとしては目の前に、元気活発で親しみやすい美少女と、クールで知的な雰囲気を持つ美少女がいるのにどうして無視できるのだろうか、と考えていたのだが。

「あゝ、初日からこれって、これからが不安だわ」

注文したパスタ料理を、フォークでくるくると巻きながら、レイラが溜息混じりに呟いた。

「でも、午後はあなたの好きな実技よ」

「実技って誰だっけ？」

「えーっと、エミス先生だねー」

「あの人って、何かやる気なさそうな感じしない？」

「見た目で判断するなよ。少なくともこの学園の教師やってんなら、腕前は確かだろ」

「それはそうでしょうけど……ま、いいわ。ストレス解消のため一暴れしますか」

「授業で暴れんな、授業で」

「いいじゃん。ねえ、もしペアを組めとか言われたら、サイガ、一緒に組もう!」

突然のレイラの申し出に、サイガは目を丸くする。

「俺で良いのか？」

「当然! 何か手加減しなくても良さそうだし」

「俺をボコボコにしても、何も問題ないってか？」

「やーねーえ。そんなこと言っていないわよ」

顔は笑ってるが、どうにも腹の底が見えない。

「サイガ……私と組む？」

「ミシエル……ああ、そうだな。逃げたい」

「ちよっと! 横取りしないでよね!」

「男の取り合いか。羨ましいねえ、サイガ」

「ザック、お前は何故さつきから傍観者スタイルを貫いている？」

「いやー、お邪魔かと思って」

「そこは俺と組もうとか言ってくれ。俺の寿命に関わる」

「何よー！？ そんなに私とが嫌！？」

「……手加減しろよ？」

「任せてよ！」

調子良さそうに笑顔を見せて言うが、どうにも心配だ。

サイガ自身、実技は得意である。だが、魔術の、しかも名門一族とやり合うとなると、不安が生まれてしまう。

そもそもサイガは魔術を直接ぶつけて戦うタイプではない。魔術で相手の隙を作り、そこに近接格闘でたたき込むのが、主流だ。

「保健室って予約出来たっけ？」

「あ、あんたねえ……少しは信用してくれないの？」

「信用してるさ、レイラの魔力を。だから、俺がやられるヴィジョンが思い浮かぶ」

「私の技量を信用しろ！」

冗談を言っただけで笑い合う。サイガは学生生活における平和な風景だな、と思った。

「あ？」

「ん？ どうしたの、サイガ？」

その時、サイガは感じていた。

異変に気付く。どうにも胸の辺りがざわついている。

嫌な予感というやつだ。

「いや、何か騒がしいなと思ってよ」

「え？」

レイラもミシェルもザックも、サイガの視線を追った。

それは学生食堂の外、ガラス張りとなっている外の風景だ。

直後。

「きゃあああああああ！」

叫び声が響き渡った。

## 騒動、逃走、追究

叫び声の元へサイガ達は駆け出した。

学生食堂の外へ出てみれば、生徒が集まっているのが視界に入った。

「あっちね」

レイラが先立って駆けていく。サイガ達は後を追うように走り出す。

生徒の集団を裂いて先へ進むレイラ。

集団を抜け出すと、そこには奇妙な影があった。

「何、あれ？」

それは小さな猿だ。全身真っ黒な毛で覆われた小さな体で、女子生徒の肩に飛びついていていた。人の手の平ほどしかない頭には尖った耳と、湾曲した牙、そして顔の大半を占める巨大な一つ目があった。

「あら、あれってこの辺りにいる魔獣じゃん」

レイラが残念そうに口を尖らせた。

「そうなの？」

「ええ。『ワオツク』とか呼ばれる猿でね。普段は山とか木が多い所で生活してるんだけど、よく民家にある食料を狙って、町中に現れたりするのよ」

「じゃあ、そんな大騒ぎする事でもないのね」

「ええ。この学園の生徒は遠い所から来る人が多いから、びっくりすると思うけど、この辺りじゃそんなに珍しいものじゃないのよ」  
「にしても、気持ち悪い一つ目だな」

ギョロリとした一つ目に女子生徒を映しながら、女子生徒の服を引っ張っている。

この猿は悪戯をしているみたいだ。

「いや、放して！」

「ギヤアア！」

「きゃあああああ！」

ワオツクが女子生徒の髪の毛を掴んだ。女子生徒が悲痛な叫びを漏らしながら、ワオツクを遠ざけようとしている。

にしても、何だ？ 何か変じゃないか？

サイガはその光景に何かしらの違和感を覚えた。

「もう、やめて！」

女子生徒の叫びに、レイラが動き出した。

指先に魔力を込めて、それを発射しようとした矢先だった。

「っ！」

レイラ達の間を一筋の光が駆け抜けた。

光はワオツクの目玉へと命中し、弾け散った。

「ギヤアアアアアアアア！」

ワオツクは目玉を押さえて、のたうち回る。

「今のは……」

サイガは光の飛来してきた方角へと振り向いた。

「落ち着け」

そこにはすりすりとした背筋と、掛けている眼鏡の奥にある他人をよせつけないような瞳が特徴の男が立っていた。その男に、サイガは見覚えがあった。

確か、入学式の時、生徒会長の背後に控えていた……。

「ねえ、あれってレイス様じゃない？」

「え！？ あの生徒会副会長の！？」

「えええ！？ 本当！？ きゃあああ、私、こんな間近で見るの初めて！」

集まっていた女子達騒ぎ出した。

その言葉を聞いて、サイガは思い出した。

レイス・アンダー、あのセレナ生徒会長を陰から支える生徒会副会長である人間だ。その腕前はセレナ生徒会長に匹敵するとも言われている。

それと女子が騒いでいる所から、想像出来ると思うが、数少ない男子の中で際立って目立つレイスは、一種の崇拜の対象となっていた。

レイスは眼鏡を指で押し上げながら、抑制の効いた口調で被害にあつた女子生徒に話掛ける。

「そのワオツクは単なる悪戯好きに過ぎない。魔獣と言われているが、大した害のない猿だ。必要以上に騒がなくとも、魔術でちよつとした脅しをすれば、尻尾を巻いて逃げる」

先ほどの光は、レイスの放った魔術だろう。

目くらましの『閃光』だ。

レイスは属性の 光 を扱う事が出来るようだ。

「君は一年生か？」

「え、あ……はい」

「初めてで驚いただろう。だが、心配することはない。怪我はないかな？」

「はい！ ありません」

頬を赤らめながら、その女子生徒はレイスを見つめていた。

もう完全に虜となっている。

「そうか、なら安心した。後は私に任せてくれ」

レイスは、『閃光』で視界を失っているワオツクに近づく。

指先を出すと、魔力を放った。放たれた魔力は、ワオツクのすぐ傍に着弾すると、爆竹のような激しい破裂音を立てた。

「ギヤアアア!？」

驚いたワオツクは不器用に走りながら、建物の外壁を軽々と登っていき、奥へと逃げ去ってしまった。

「これで、よし」

レイスは涼しげな表情でワオツクの背を見送った。

サイガは今の魔術に少しばかり驚いていた。

魔力を使って周りの空気を振動させ、強烈な音を発生させる。これは何でもないように見えて、その実、かなり繊細な技術が必要と

する。

魔力を使って音を立てる事は難しくはない。

火の魔力で爆発を起こせば爆音が、地を使って大地を揺らせば地響き音が起こせる。

だが、魔力そのものを使って音を立てるのはかなり難しい。

爆音や地響き音は魔力によって、操られた火や土が周りの空気を振るわせて出した音だ。決して魔力そのものが出した音ではない。

レイスの魔術は僅かに混じっていた光の属性以外、他の属性は感じられなかった。

つまり、レイスの魔術には空気を振るわせるような属性はなかったのだ。

レイスは空気を操ってはいなかった。空気を操らずに、空気を振動させていた。

魔力とは実体を持たない存在だ。

目に見えない力をぶつけることで、目に見えない空気を振動させる。

加えて、レイスはただの音ではなく、意図的に爆竹のような破裂音を発生させたのだ。音を発生させるだけでなく、音の高低まで調整してみせたのだ。

さりげない技術の高さが、披露されたのだ。

もっとも、その技術の高さに気付いたのはサイガを含めて数人しかいなかったようだ。

その時、サイガの思考を中断するように乾いた拍手が響いた。

「さすがの手並みだな、副会長殿」

いつの間にかそこに居たのは、槍を携えた風紀委員長のカナメだ。恐らく、数人の中の一人だろう。

「あれって、風紀委員のカナメ委員長!？」

「まあ! なんて凛々しいのお方なのかしら!」

「ああ……お姉様!」

どうやら、カナメも女子から人気があるようだ。本人は苦笑いだ

が。

「風紀委員長か。見ていたのかな？」

「いやなに。昼はいつもこの近くで取っっているのだが……騒ぎを聞きつけて来てみれば、全てが終わった後だったということだ」

「そうか。済まないな、仕事を奪ってしまったのかもしれない」

「気にするな。魔獣の追い払いは必ず風紀がやるとは限らない。そもそもワオツクの進入は委員会だけでは手に負えないものだからな」「やはり生徒だけではカバー出来ない？」

「それもあるが……学園側に設備の強化や罠の設置などの対策をしてもらわなければ、解決出来ないのだ。そこら辺は我々には出来ないからな」

「なるほど。生徒会長に話して、学園に掛け合ってもらえるようしてみるよ」

「済まないな」

カナメはワオツクが去っていた方角へと目をやる。

「ふむ……それにしても……」

「どうかしたか？」

「いや、見かけないワオツクだなと思って」

「見かけない？」

「ああ、あんな毛色をしたワオツクを見たことがないと思ってな」

「そうか？ ちょっと濃い色だが、至って普通に思えたが」

「ふむ、そうだろうな。考えすぎのようだ」

カナメは振り返る。その際に流れる黒髪と担がれている黒い槍が太陽の光を受けて、輝きを放っていた。その光景に女子生徒達が目を輝かせていた。

「それではこれで失礼するよ」

「うむ、風紀の仕事、頑張ってくれ」

「ああ」

そのままカナメは去っていく。

去り際、サイガの事をちらりと見ていたのを、サイガは感じてい

た。

なので、極力視線を合わせないようにしていた。

「あーあ、何かつまらないわねー。もっと刺激的な展開を期待してただけだ」

本当につまらなさそうに、レイラは言った。

「お前ね、一体何を期待してたんだ？」

「それは勿論、学園崩壊の危機が訪れる事件とか」

「頼むからやめてくれ……」

サイガは溜息を吐きながら、カナメが去っていった方を見つめた。

見かけない毛色、ねえ。

自身も同じような違和感を持っていた事に、ちょっとした喜びを感じながら。

「はい、それじゃあ授業始めようかねー」

実練施設、正式名称は実戦式訓練用施設、そして別称が演習棟と呼ばれる建物でエミスの授業が始まるうとしていた。

制服姿の生徒が列を作って、並んでいる。

「なーんか、昼間ちよつとした騒ぎがあったみたいね？ いやー大事にならなくて良かった、良かった」

本当に心配しているのかどうか、定かではないヘラヘラした顔で笑うエミス。

「んじゃ、皆さんわかってると思うけど、これは実技の授業です。そんなに厳しくはしないけど必修科目だから、決して落第点を取るような結果を残さないように心懸けて下さい。まあ、最悪の場合、僕が試験の採点を調整すれば、みんな受かるんだけど」

最後の部分に教師としてあるまじき発言が含まれたが、気にする生徒はいなかった。

そこで、並んでいる生徒の中で手が挙がる。

「どうしたのかな？ レイラさん」

「えっと……何となく気になったんですけど、この授業の担当ってエミス先生ですよね？」

「そだよ」

「じゃあ……何でマリー先生が居るんですか？」

レイラの言う通り、エミスの傍にはマリーが立っていたのだ。それはサイガも気になっていた事でもある。

「私が居ては、不満ですか？」

「あ、いえいえ。そういう訳ではなく……そのマリー先生は何をするのかなって」

レイラの疑問に答えたのはエミスだ。

「初めの時にも言ったと思うけど、マリー先生は中から遠距離の魔術が専門だからね。僕は近距離戦が専門。僕一人じゃ教えきれない部分が出てくるの。理解出来るでしょ？」

「え、ええ……はい」

「うんうん。んで、話を戻すと、今日は何をするかという事なんだけど、初日だし皆さんの实力を知っておきたいと思います」

嫌な笑顔を浮かべながら、エミスは口を開いた。

「よって、これから一対一の模擬戦闘を行ってもらいます」

「げええええ！？」

「やったああああ」

二つの叫び声上がる。

前者はサイガで、後者はレイラ。サイガが予期していた一番最悪な結果、ペアを組むという事になったからだ。

「先生ー！ ペアは自由に組んで良いですよね？」

レイラが嬉しそうに手を挙げながら、エミスに質問する。

「うん……それでも良いけど、やっぱり最初ぐらいは僕の指示に従ってもらおうかな」

「えっ！？」

エミスの言葉にレイラは落胆の声を上げ、サイガは人知れずホッ

と一安心する。

「レイラさんには悪いけど、ちゃんと実力を計るためには釣り合いの取れた組み合わせじゃないといけないからね。レイラさんは優秀な成績で入学したんだから、その辺に自覚を持ってもらわないと」  
「は、はい……わかりました。でも、そしたら私の相手は誰がするんですか？」

「それは、お楽しみ。まあでも、そこまで気にしなくても良いよ。どうせ、模擬戦闘を一通りやったって時間は余っちゃうし、余った時間も対戦に費やしちゃうから、その時は好きな人と対戦してよ」  
「は!？」

サイガは思わず声を上げた。すると、列の前方に居たレイラがゆつくりと振り返り、楽しそうな　サイガには邪悪に見えた　笑みを浮かべた。

「だつてさ、サイガ」

「……先生、保健室の予約って出来ます？」

「あ……うん、保健の先生に伝えておくよ」  
クラスで笑いが起きた。

対戦はスムーズに行われた。

五分程度の模擬戦闘を行い、終了と同時にエミスとマリーがアドバイスや注意をする。

その繰り返しだ。

そして、出番はサイガに回ってきた。

「まあ、この組み合わせよな」

相手に選ばれたのはザックだ。クラスに二人しかいない男子組の戦いに女子全員が注目していた。レイラも、サイガの実力を見ようと、試合コートのギリギリのラインまで出てきている。

「見られながらって、何か嫌じゃね？」

「お、俺としては、マリー先生の目の前で披露する事に、き、緊張してるぜ」

「……お前らしいな」

所定の位置に着き、見合い合う。まるで、決闘みたいだとサイガは思う。

「それじゃあ、構えて！」

エミスの声で自然と体に力が入る。

そこでサイガは思考を開始した。

さて、どうしたものか。

本気を出しても構わないが、そうになるとレイラを刺激しかねない。それだけでなく、教師の目に留まってしまうような、目立つ事はなるべく避けていたかった。

ヘタレでもいいんだが……それじゃあ俺自身の实力を知ることとは出来ない。

ある意味、これも良い機会である。同年代の人間と戦うことで、己の实力を計れるのだから。

んじゃま、ある程度でいつか。

「始め！」

開始の合図と同時にザックは魔力を練り始めた。

攻撃魔術が得意なザックは、マリーが担当する魔術を、マリーの目の前で使うようだ。

アピールのつもりか？

ザックはバックステップを踏んだ。サイガとの間合いを取ろうと考えたのだ。

対して、サイガはまったく動こうとしない。見合った位置から一歩も動いてないのだ。

この状況に試合を見ていた全員が疑問に思った。

何故、動かない？ と。このままではザックの遠距離魔術の良いのである。

相手が遠距離の魔術を練っているなら、自然と動きが決まってくる。

相手の射程圏内から外れるため間合いを詰めていくか、防御魔術

で障壁を作って備えるかだ。

だが、サイガはどちらもしない。魔力を練っている様子も感じられない。

「だあああ！」

ついに魔術が放たれた。射出したのは 地 の属性を含んだ弾丸だ。人の足以上の大きさを持つ弾は、ザックとサイガのちょうど中間ぐらいまで来ると、無数の小粒へと破裂した。

一つの弾丸が、散弾へと化したのだ。

雨あられとなって襲い掛かる 地 の弾丸を、サイガは集中して見た。

そして一つ深く呼吸をすると、走り出した。

迫り来る石つぶてを、避けて進んでいく。

サイガの動きにザックは目を見張った。ザックの放った魔術は散弾だ。隙間無く弾が並ぶように意識したつもりだった。

だが、サイガはそれらを避けていく。擦りもしない。

ザックは慌てて、次の魔力を練り始める。即興で作った同じ 地 属性の魔術の弾を床に向けて放った。

サイガは走って来るのだから、その足場を崩して妨害しようと試みたのだ。

「甘い」

サイガの言葉だ。ザックの放った魔術弾が床に被弾するのと同時に、サイガは飛翔した。

とても脚力だけの高さとは思えない飛翔だ。脚力だけと感じたのは、ザックにはサイガが魔力を練っているように感じられなかったからだ。

事実もそうだった。

サイガは脚力だけで飛んだのだ。ザックが首を曲げてまで、見上げるほどに。

ザックは焦り、近距離用の魔術を練り始める。遠距離と違ってこの魔術は早急に練り上げる事が可能だ。

だが、それでも間に合わなかった。

ザツクの元へと飛び掛かるサイガは腕を突き出した。殴るつもりか、ザツクはそう感じたが、彼の視界は別の形を映していた。

サイガの手は拳を握ってはいなかった。逆に手を開いて、指を曲げて引いているようだ。

まるで、掌を見せつけるかのようだ。

「波っ！」

サイガの掌が打ち込まれた。咄嗟にザツクは両腕を交差させて防御していたが、無駄だった。

打ち込まれた瞬間、ザツクは背筋に寒気を感じた。

想像を遙かに上回る力に、両腕は弾かれる。体勢を崩された所に着地したサイガによる次の一撃が叩き込まれた。

それは肘鉄だ。ザツクの腹、鳩尾辺りにサイガの肘が打ち込まれた。

強烈な力による、急所への攻撃。

それが決め手だった。

ザツクは体が動けず、魔力も練られなくなった。

「そこまで！」

エミスの声が響いた。

「勝負は着いた。それ以上はダメだよ」

エミスとマリーがこちらに駆け寄るのが見えた。

サイガの足下でザツクが苦しそうに蹲っている。

「悪いな、ザツク。手加減したつもりだったんだが」

「……この野郎……お前なんか、レイラに、ボコボコにされちまえ……」

息も絶え絶えに、ザツクが呪いのような言葉を言ってきた。

「はい、二人共お疲れさん。マリー先生、彼の治療をお願い出来ますか？」

エミスの言葉にザックが反応した。故意に苦しそうな声を上げたのだ。

……あざとさが丸見えだ。

「……いえ、男の子なのでこれくらいは大丈夫でしょう」

ザックがショックを受けたように目を見開き、眠るように目を閉じた。

どうやらサイガの攻撃ではなく、マリーの一言がとどめを刺したようだ。

「うーん……ザック君はまあ普通かな。マリー先生の評価は？」

「駄目ですね。そもそも試合早々遠距離戦に持ちこもつとしたのが誤りです。相手の動きを窺ってから魔力を練るべきです」

「なるほど、それは後で本人に伝えておくとして……サイガ君？」

「はい？」

「君、魔術使った？」

サイガはわざとらしく、少し考える仕草をしてから答えた。

「使ってませんね」

「あのね……駄目じゃない使わなきゃ、それがこの模擬戦の目的でもあるんだから。苦手でも使ってくれなきゃ評価出来ないじゃない」

「申し訳ありません。わざわざ苦手なものを使ってまで戦うのは、慣れてなくて」

「それはそうだろうけど……でも、君の近接戦闘は文句なしだから、何とも言えないんだよね」

困った様に頭を掻きながら、エミスは溜息を吐いた。

「しょうがない。まだ模擬戦はあるし、次の模擬戦は絶対使つてよ？」

「……わ、わかりました」

次の模擬戦、それはつまり……。

首を曲げれば、腕を組みながらニヤニヤと笑みを浮かべているレイラの表情が視界に入った。

「やれやれだ」

覚悟を決めなければならぬな、と思いながらサイガは試合コートから外れる。

ふと視線を感じたので、振り向いてみる。

サイガの事を見てたのは三つ編みの少女、センだ。

びっくりしたような、目を見開きながら、じっとサイガの事を見ている。

これは……まずったかな？

サイガは正体を隠すという目論みで、センに声を掛けてみる。

「何だ？ 俺に何か用か？」

センは声を掛けられ、慌てふためくと、

「ご、ごめんなさい！」

と言つて、走り去ってしまった。やはり声を掛けられるのが苦手のようなのだ。

サイガの目論み通り、センにこれ以上の不審を抱かせずに済んだ。

この場しのぎだけだな。

サイガは改めて、目立つような力を見せないように心懸けることにした。

講義では理解に苦しみ、実技では本気を出さないよう苦労する。

前途多難だな、とサイガは苦笑いした。

一通りの模擬戦闘が終わった。

ここからの模擬戦は希望制だ。やりたいと思った生徒だけが授業が終わるまでの間、模擬戦が出来るという形だ。

ちなみにミシエルはセンと模擬戦をやった。

エミス曰く、二人はどちらも平均的な技術の持ち主だから組み合わせとしてはちょうど良いのだとか。平凡な試合が見られるようなのだ。

エミスの言った通り、試合内容もそこまで特出したものではなかった。

ミシエルはサイガ達と違って実技が苦手なタイプのように、魔力

の練り方などで苦戦していた。相手のセンは性格から容易に想像出来たが、人前に出た途端、緊張したのかまったく集中出来てなかった。

何というか、グダグダだったのだ。

そして、レイラの相手はと言うと、なんとマリーだった。

その事にレイラは何処か嬉しそうに試合へ臨んだが、マリーは本気を出さず一方的に防御に専念する戦い方をした。表現するなら教師として、相手を「見る」だけの戦い方だった。

その結果にレイラは不完全燃焼そうに、苛ついていた。

だが、その表情はエミスの言葉で晴れやかになっていた。

「はい、じゃあ一通り終わったから、こっからは希望制ね。試合をしたい人は先生に申し出てね。無断はやめてね」

レイラの首がぐるりと周り、その瞳がサイガを捉えた。

直後、サイガは走り出した。

「ちよつと!? なんで逃げるのよ!?!」

「すまん! この後、保健室に予定が入っているんだ!」

「それは私との試合の後でしょー!?!」

ガシツと腕を掴まれた。サイガは追いつかれてしまったのだ。

結構本気で逃げたのにこいつ足速いな、と思いながらサイガはクラスの方へと目を向けた。

「だ、誰か! 今から試合する人居ないのか!?!」

しかし、サイガの叫びも虚しく、誰も前へ出る人が居なかった。

居たとしても、レイラとサイガの試合を見てから、やるつもりだろう。

「ク、クソ! おい、お前ら! 何でそう微笑ましい顔を浮かべて

やがる!?! ミシエル、ザック! 助けてくれ、このままじゃ俺は

……!」

「……やられてしまえ、お前なんか」

「サイガ……頑張つて。応援してる」

「さあ、行くわよ!」

「ああああああ……」

レイラに腕を掴まれ、ズルズルと試合コート内へと引き摺られる。

「エミス先生ー！ お願いしまあす！」

「先生、助けて下さい」

「え……と、それじゃあ、それぞれ位置に着いてね」

スルーかよ！？ と内心でツツコミを入れるのは、サイガの現実逃避だ。

とは言っても、ここまで来てしまったからには逃げられない。

腹を括るしかない。

サイガはレイラと向かい合う。所定の位置に立つと、深呼吸をした。

「お、やる気になったわね」

「うるせえ」

本気を出したくはないが、レイラが相手では、一筋縄ではいかない。

これは少し構えないとな。

「はいじゃあ行くよー。構えて」

体に力が入る。

「始め！」

初めに動いたのはサイガだ。レイラ フレリレスは中距離から

遠距離の魔術を得意とする。空いた間合いは危険なのだ。だから、

サイガは接近戦に持ち込んだ。

「ふふふ……」

対して、レイラは笑みを浮かべると、力を込めた。

サイガには見えた。レイラの魔力が爆発的に増大していくのを。

「まずい……！」

「はあああああああ！」

そして文字通り爆発する。レイラの周りで爆発して生まれたのは、美しく幻想的な漂いだ。

「それが……噂の」

「ええ、そうよ。これがフレリレス……いいえ、私の力。『蒼炎』よ」

それは蒼い炎だ。レイラの体に纏わり付くように、漂う姿は思わず目を奪われてしまうものだった。ゆらゆらと揺れる炎は、サイガを誘っているようにも見える。

「間近で見るとやっばすげえな。マリー先生との試合のと比べると迫力が違うな」

「ふふふ、わかる？ 私の炎は近づく者を虜にするの。遠くから見ているはダメよ」

レイラが腕を振るった。

反射的にサイガは体を動かし、そのすぐ傍を蒼い炎が通り過ぎて行った。

サイガの背後で爆破音が響いた。

「なかなかの反射神経ね」

「お前……今の当たってたら火傷じゃ済まないぞ」

「だ〜いじょうぶよ！ 手加減はしてる」

絶対嘘だ、とサイガは思いながら、冷や汗を垂らす。

「さあて……じゃあ次は大きいのいくよー！」

「手加減してねえーじゃねえか！」

だが、サイガの叫びはまたもや虚しいものとなった。

レイラの魔力が、周りの炎が増大しているのだ。そして、それはレイラの上空へと集まっていく。巨大な蒼い火の玉が形成されていく。

「さあ、サイガ。これは耐えられるかしら？」

レイラが火の玉を放とうとした時だ。

「レイラさん！ それはやり過ぎです！ 抑えて下さい！」

マリーの怒鳴り声が響いた。

しかし、時すでに遅し。火の玉はレイラの手元から離れ、サイガへと襲い掛かっていた。

あ、終わった。

迫り来る炎を見ながら、サイガは諦めた。

視界の端でエミスとマリーが何かしらの魔術を放っているのが見えたと、そんなのどうでも良かった。

ま、何だ。本性がバレなかっただけで、良しとするか。

サイガに火の玉が直撃した。

そして、その後。

サイガは予定通り保健室へ運ばれる事になった。

「あはは、ごめんごめん」

「……はあ、ったく、あれほど手加減しろと言ったのによ」

保健室で目が覚めたサイガは、レイラが傍に居た事に気が付いた。どうやらあの後、マリーにかなり叱られたようなのだ。

そして、償いのつもりでサイガの様子を見て来てくれたらしい。

「本当にごめんね。サイガは結構耐えられると思ったから」

「変な信用するな。あんなの避けられねえし、どうしようもねえ」

今はその帰り道だ。とは言っても、サイガ達は真つ直ぐと校門へ向かってなかった。

マリーの出した宿題が余りにも酷なため、レイラがサイガと一緒に解きたいと言ってきたのだ。なので、二人で学園の図書館にて勉強することにした。

「しかし、マリー先生も先生よね。止めるならもつと早めに止めて欲しかったわ」

「……まさか本気だとは思わなかったんだらう」

「そうかしら。……ホントの事言うかね、サイガに当てたあれはマリー先生に当てようと思ってたのよ」

「お前、恐ろしい事考えるな！」

「宿題の鬱憤でもぶつけようと思ったの」

「でも、出来なかったよな？」

「何というか、やりにくかったのよね。ぐちゃぐちゃと喋ってこちらの欠点を指摘してくるし、魔術を妨害ばかりでしか使ってこなかったり……面倒だったのよ」

「練られなかったのか？ 魔術を」

「そうなの。集中させてくれないというか、ホント、試してるみたいに魔術を放ってくるんですもの。余計に苛立つというか」

「まあ、教師に喧嘩売るなってことだ」

「でも、私負けず嫌いだから……」

レイラはサイガより先へと走り、途中で止まると、振り返って笑った。

「だから、今度は宿題を完璧に片付けて見せつけてやろうと思うの」「……ま、先生を灰にするより、余程良い選択肢なんじゃねえの？」

「ふふふ、そう？ でも、協力してね。私一人じゃ無理だから」

「それはお互い様」

サイガだってあの宿題を一人で終わらせるのは無理だと考えている。

出来ればミシエルに手伝って欲しかったが、サイガが寝ている間に帰ってしまったようなのだ。見捨てるとはなんて非道な、という思いは心の内にしまっておく。

マリーの宿題を片付けるべく、サイガとレイラは図書館へと向かった。

そして、図書館にて。

「すぴー……すぴー……」

「寝てんじゃねえか」

レイラは広げた教科書や参考書の上に頭を乗せて寝ていた。枕にはちょうど良いみたいだ。

「……………」

サイガは宿題を一旦中断して、立ち上がった。

ここは図書館だ。もしかしたら、目当ての資料があるかもしれない

い。

「えーと……『魔獣』の項目は……ここだ」

調べようと思ったのは今朝の違和感についてだ。

「あった。やっぱりあるな」

棚から引き出したのは一冊の分厚い本、『アミリシア王国魔獣資料集』だ。

「この地方の名前なんて言っただけ？ ……ああ、ウインス地方だ」

ここ、レーンベルク魔術学園がある地方をウインス地方という。

中心部から、南西に位置する盆地である。

「ワ、ワ、ワ……あった。『ワオック』」

サイガが調べていたのはワオック。今朝方、女子生徒に悪戯をするという騒ぎを起こした一つ目の猿の魔獣だ。

「……ふーん。毛色は茶色や焦げ茶、色素が薄い奴には灰色っぽいのがいると」

資料を閉じると、息を吐きながら上を見つめた。

「つまり、黒いワオックは存在しない」

棚へ資料を戻してから、サイガは腕を組んだ。

あれは見間違いないんじゃないかじゃなかった。明らかにあのワオックは黒かった。それも墨のように真っ黒だ。おかげで一つ目の不気味さが際立っていたな。

サイガが感じていたざわつき。それはワオックの毛色の違いだけではなかった。

そもそも、あの猿。何をしようとしてたんだ？

食料を狙って民家に現れる。ならば、食堂の近くに現れるのも納得できる。あそこはテラスもあるので、生徒から食料を奪い取る機会は山ほどあるだろう。

だけど、あの猿は食料を盗ろうとしなかった。

ただ、女子生徒にちょっかいを出していたのだ。

それに……あの目。

脳裏に思い浮かべるのは、ワオックの一つ目だ。いや、正確には

目の色というべきか。

あいつ……妙に平坦な目つきだったよな。だが、女子生徒に悪戯を仕掛けるという事はそれなりに興奮状態であったということだ。だが、あの目つきはおかしい。あれじゃあ、まるで……

……まるで、感情がなかった。

無表情で人を襲うというのは、違和感を覚える光景だ。

しかし、だとするならば、あのワオックはどうしてそのような表情で人を襲っていたのだろうか。何かしらの原因とも呼べるものがあるはずだ。

これは、どうにもきな臭い。

「……色々と嫌な選択肢が出てきたな。これは少し警戒しておくか」  
気になる事が多いが、この件についてサイガは放置しておくことにした。

それよりも、やらなければならない事がある。

それは未だ寝ているレイラを起こして、宿題を片付ける事だ。

## 黒き突風

嫌な予感というものは恐ろしく当たるものだ、サイガは実感した。

人間の本能は身に降りかかる危険を察知すると、心臓の鼓動という警告音を発する。

まさに、今がその状態であった。

「？ 何かしら、あの人集り？」

朝、登校途中で会ったレイラと一緒に学園へ向かっている時だ。

サイガ達は校門の前に生徒が集まっているのを見た。

「……………」

レイラの疑問に答えず、サイガは沈黙を作りながらゆっくりと人集りへ近づいた。

「あ、ちよつと、サイガ！」

後ろからレイラが追う。サイガは生徒の集まりを掻き分けて、進んでいく。

「ちよつと！ サイガってば！ ……………え…………何これ？ どうしたの？」

そこには一人の女子生徒が倒れていた。顔は真っ青になっており、まるで病人だ。

「ね、ねえ！ どうしたの、この子？ 助けないの？」

レイラの叫びに近場に居た生徒が答えた。

「そ、それがいくら治癒魔術かけても一向に良くならないのよ。だから、今先生を呼んできているんだけど……………」

「そ、そんな……………」

レイラが言葉を失うのも、サイガにはわかる。

倒れている女子生徒は、見るからに死にかけている。顔は青ざめているのに、倒れている本人はまったく苦しそうな表情をしていない。

これは痛みすら感じてない状態、つまり体の免疫力が働いていない証拠だ。

「あ、サイガ」

サイガは倒れている生徒に近づく。屈んで、生徒の体を隅々まで見ていく。

目立った外傷はないか。

サイガは生徒に手を伸ばした。

「サイガ！」

レイラの制止も耳に入れず、倒れている生徒の首に指を触れて脈を測ろうとした。

触れてから、サイガは気付いた。女子生徒の首もとに何か痕あとのよ  
うなものがあることに。

「これは……」

「はいはい、退いて退いて！」

そこで、保険医が駆けつけてきた。

サイガとしてはタイミングが悪すぎると感じたが、生徒の状態を  
考えて、黙って退いた。

「ねえサイガ……大丈夫かしら？」

「多分な」

この学園に居る職員はどれも優秀な人材ばかりだ。心配せずとも、  
先生方なら何とかしてくれる。そういつた言葉をレイラに掛けなが  
らも、サイガ自身抑えきれずにいた。

不穏な空気を。

今朝の出来事は瞬く間に噂として学園中に広まった。

教師達は今朝の事には一切触れてなかった。どうやら原因を解明  
するまで、生徒に下手な刺激を与えないようにするためだろう。

しかし、それは間違った考えだとサイガは思った。

倒れていた生徒の目撃者は数え切れない。登校時間で、しかも校門の目の前なのだ。

目撃してなかった方が少ないと言っても過言ではない。

沈黙を作る事こそが生徒に不安を与えるという行為に他ならない、とサイガは考えていた。

それでも教師達が沈黙を保っている事に、サイガは不安が増していくのを自覚した。

教師が黙っている。それはつまり、彼らにとっても不気味な出来事だったという事だ。

この学園で魔術を教えている身ならば、少なからずとも皆熟練した人達だ。その経験豊富な人間が沈黙を作らざるを得ない何かが、今朝の出来事にあつたということだ。

「なんか沈んでるわね」

隣から声を掛けられて、サイガは顔を上げた。

中庭の石造りのベンチ　レイラと初めて会った場所だ　で、レイラとサイガは隣同士に座りながら、昼ご飯を食べていた。

ミシエルやザックは居ない。

二人だけの理由は単純。マリーの出した宿題を二人揃って、ギリギリで提出出来なかったからだ。おかげで昼休みを削ってまで、二人はマリーにしごかれていた。

せっかく図書館で居残りまでして勉強した二人だが、無駄に終わったようだ。

サイガは、成績トップで入学したのにどうして出来ないんだ、とレイラに問うたが、レイラは、私って宿題をやらないタイプなのよね、などと訳のわからない事を言い出した。

サイガはそれ以上の追及をしなかった。

ザックはマリーの罰を受けるためにわざと宿題をやってこなかったのだが、マリーは何故かザックには厳しく接しなかった。なので、ザックは非常にショックを受けていた。

どうやらマリーはそんなザックの下心を見抜いて、あえて何も言

わなかつたらしい。

腹の底を見抜く恐ろしい教師であると、サイガは思った。

現在、昼休み終了まで残り十分を切っている。

さすがに時間がなさ過ぎる。もう少しゆっくりと昼を食べたいものだ。

「そう見えるか？」

遅れてレイラの言葉にサイガが答えた。

「ええ。今朝の事がそんなに気になる？ サイガって案外臆病？」

「臆病じゃねえよ。でも、気になっているのは確かだ」

「そっか。……実は今朝の事に関するちょっとした情報を手に入れてるんだけど、聞く？」

レイラが得意げな顔でそう言った。

サイガはレイラが情報を集めているような素振りをまったく感じなかったのだが、いつの間に関に手に入れていたのだろうか。女子には女子なりの情報網があるのかもしれない。

「ああ、聞かせてくれ」

「ふふん、貸し一つね」

得意げな顔のまま、腕を組んでレイラは話し始めた。

「今朝の事さ、何かおかしいとは思えない？」

「何かって？」

「目撃情報よ。誰もが倒れている女子生徒を目撃している。朝の登校時間の校門前ですもの、それは当然よね」

もったいぶるように、一息を置いてから、レイラは続ける。

「それなのに、誰も倒れる瞬間の生徒を見ていないのよ」

「倒れる瞬間？ ちょっと待て、あの生徒はいつから校門前で倒れてたんだ？」

「そこなのよ！」

レイラはまさに今の質問を待ってたみたいで、満足げな表情になる。

「実はあの生徒、最初は違う場所で倒れてたのよ」

「違う場所……校門前じゃないのか？」

「ええ。何とね、驚くことに……最初はあの生徒、校門に続く道の脇に植えられている茂みの中に、隠されるように倒れてたのよ」

「ちよ、待て！ 本当か！？」

「ふふくん、驚いた？ 実際一番最初に見つけた人が校門前まで運んだみたいなの」

レイラの言っている情報が事実ならば、これは歴然とした事件だ。女子生徒は何者かに襲われ、さらには証拠隠蔽までされたのだ。

「本格的に話がヤバイ展開になってねえか？」

「でしょでしょ！？」

サイガはレイラの情報に不安を隠し切れなかったが、それに対してレイラは期待に満ちた表情をしていた。

「……お前、何でそんな顔してんだ？」

「だってさ、これから何か起こりそうな予感がしない？ サスペンスみたいじゃない？」

「そう楽観的な状況じゃないと思うんだが……」

どうしてここまでレイラは余裕なのかとサイガは考えたが、フレリス家の人間ならこのぐらいの問題に動じないのかもしれないと結論付ける事にした。

ちょうどそのタイミングで、昼の終わりを告げる鐘が鳴った。

その日の放課後はまた四人で帰る事になった。

あのマリーが再び膨大な量の宿題を出してきたので、レイラとサイガとザックはミシエルに放課後わざわざ居残ってまで手伝ってもらった。ザックも今回は真面目に宿題をやっていた。

「ごめんね、ミシエル。わざわざ一緒に残ってもらって」

「いいわ、別に。でも、意外。レイラって成績トップなんでしょ？」

どうして宿題が出来ないの？」

「私って宿題やらないタイプだから」

「……………」

「駄目だ、ミシエル。俺も尋ねたんだが、これしか答ええない」

「ねえ、私の答えってそんなに変？」

「だってお前……こんな人間が総代って、納得いかないだろ」

「そうかしら？」

「いや、そうかしらって、お前……」

「天才肌」

ミシエルの言葉にサイガとザックは頷いた。

どうやらレイラとは根本的にレベルが違うらしいと、サイガは呆れ、溜息を漏らした。

「ところでさ」

ザックはそう切り出し、不安そうな表情になる。

「今朝倒れたっていう女の子、まだ起きないらしいな」

「……ええ。体力は回復しつつあるとは聞いたけど」

「不気味だな。昏睡状態の原因は一切不明なんだろ？」

「しかも、誰の手による者かも不明。その女子生徒が襲われた動機も不明。そして、これは噂なんだけど、今回の件、過去に例がないそうよ」

「……………」

サイガは学園内の見渡した。

今は放課後だ。しかもサイガ達は居残りをしていたので、通常よりも遅い時間帯だ。それなのに学園内の残っている生徒が多く見られる。

但し、その見られる生徒にはある共通点があった。

「風紀委員の腕章……」

全員が青い布地に金色の刺繍を入れた腕章を装着しているのだ。

その装飾は風紀委員である事を示している。

恐らく今朝の事で見回りを強化しようと考えたのだろう。

あの風紀委員長の事だ、この警戒態勢にはある程度の信頼を置い

ても大丈夫だろう。

「な〜んか、緊迫した雰囲気ね」

「当たり前だ。緊張をしていないのはお前だけだろ」

生徒の一人が何者かに襲われた。動機がわかってない以上、もしかしたら愉快犯である可能性が考えられる。

つまり、次に狙われるのは自分かもしれないのだ。

この可能性がある限り、生徒は安心出来ないだろう。だから、風紀委員が力を入れて見回りを強化したのは頷ける話だ。

それに学園の面子も考えられる。学園としても、伝統ある歴史に汚点を残すような事だけは絶対避けたいと考えているに違いない。

このレーンベルク魔術学園は戦前から存在する建物なのだ。

そんな学園で生徒が襲われて重傷を負ったともなれば、名誉に関わる話になる。

学園側も全力でこの奇怪な事件の解決に取り組むだろう。

サイガがそこまで考えた時だ。

突如体が揺らされるような錯覚を感じた。小さいが確かに感じられるその揺れは、体の芯が冷えて、頭の先が熱くなるような感覚だ。この感覚にサイガは慣れている。だからこそ、すぐに体が危険信号を発した。

それは魔術が使われる感覚だ。しかもかなり大きめの魔力が使われている。

学園内で授業以外での魔術の使用は限度が設定されて、制限されている。軽い魔術程度なら使用しても良いが、周りに混乱を与えるような膨大な魔力を必要とする魔術は禁止されている。

そして今感じた魔力は明らかに、その限度を超えていた。強烈な感覚に素早く反応したのはサイガとレイラだった。

「今の！」

「サイガも感じた！？ こっちよ！」

ミシエルやザックも感じたらしいのだが、まだ動揺を抑えられていないのか呆然としていた。二人は先に走り出したレイラ達に遅れ

て、二人を追いかけるよう走り出した。

「レイラ、位置わかるか!？」

「こっち!」

レイラが先導して、その後ろをサイガ達が追う。

サイガは辺りを窺った。

突然走り出したレイラ達に不審な目を送る風紀委員達。だけど、彼らは魔力に気付いた様子がなかった。

何故だ？

風紀委員ともあれば、今の魔力に気付いて当然のはずだ。実技に乏しいミシエルでさえ気付くような魔力なのだ。

なのに、誰一人として気付いていない。

なにか、異常であった。

「この建物の裏よ!」

レイラが言った建物は実験棟と呼ばれる建物だ。

その名が示す通り、魔術を応用した様々な実験を行う施設だ。中に入っている材料によっては可燃性のあるものや有毒性のあるものなど、危険度が高い。下手をしたら大爆発を起こすかもしれない。

サイガ達は実験棟の裏に出た。

そこでサイガは光を見た。

「これは!」

しかしすぐに光は消え去り、後に残されたのは一つの丸い影だった。

「何……こいつ?」

ミシエルが後ずさりする。

サイガ達の目の前に居たのは、巨大な蜘蛛だ。

灰色の全身に細かな白い毛を生やしている。人間の頭二つ分以上はある顔には、十二の瞳が並んで赤く光っている。顔の後ろにある巨大な腹は小刻みに震えながら、透明な液体を放出している。

「き、気味が悪い」

ザツクの顔が青くなる。

蜘蛛は前足と思われる二本を擦り合わせながら、一歩、こちらに近づいた。

「手を洗ってるみたいな動きね」

「呑気だな、お前は」

レイラは普通通りの顔つきで、サイガは目を細くして冷静になる。

「でも、蜘蛛ってことは、これは苦手じゃない？」

そう言って、レイラの両手が燃えだした。

儂げな煌めきを放つ淡い炎、『蒼炎』だ。

「レイラ、一発撃ってくれるか？」

「おっけー、ぶち込んでやるわよ！」

女性らしからぬ言葉を叫びながら、レイラは片腕を振った。

蒼い炎は蜘蛛の顔面目掛けて、軌道をずらすことなく飛んでいく。

しかし、蜘蛛は歯の生えた口を開くと、粘着性のある液体を吐き出した。

液体はレイラの放った『蒼炎』を溶かすように消し去ってしまう。

「うっわ……私の炎が……」

「これは作戦を立てて、行った方がいいな」

「作戦？」

レイラが首を傾げる。サイガは首を縦に振って頷きながら、

「俺とザツクはこいつを惹きつける。その隙にレイラとミシエルは

こいつの背後から援護をしてくれ。但し、あいつの腹部に気をつける。絶対に糸を吐き出してくる」

「わかった。ミシエルとザツクはそれで良い？」

「……うん」

「任せろ。結構こういった魔物退治は慣れてる」

「よし、なら行くぞ。合図するから、それで女性陣は走り出してくれ。ザツクは攻撃を」

三人が、了解、と頷く。

サイガとザツクが前へ出る。蜘蛛もじりじりと近づく。

沈黙の睨み合いが続いた。

サイガは体の底に集中した。練り上げるのは己の魔力とも言える存在だ。

サイガの場合、魔力と呼ばず「気」と呼んでいる。気を練り終えると、サイガは蜘蛛の目に集中した。

奴の注意を一瞬でも逸らす！

サイガは腕を突き出した。

「波ッ！」

突き出した掌から練った気を波動として撃ち放つ。

威力はないが当たれば、相手の平衡感覚を崩せる、ちょっとした目くらましだ。

見事に命中、蜘蛛は怯んだように、脚の関節を折って縮こまった。

「今だ！」

サイガは合図を叫んだ。

合図に応じ、レイラとミシエルが蜘蛛の脇を抜けて走る。

「うおおおお！」

ザックは溜め込んだ火の魔力を数発、放った。

レイラとは違う普通の赤い炎の玉が、蜘蛛の顔面に全弾命中する。十二の瞳が妖しく光る。

「気を付ける！来るぞ！」

蜘蛛の腹部が震え出す。腹部の先にある突起物から糸が噴出し、レイラ達に降りかかる。

「甘い！」

しかし、レイラの『蒼炎』が蜘蛛の糸を焼き切った。

そのまま続けて、レイラは蒼い炎を放出する。灼熱の『蒼炎』は腹部に命中する。

目立った外傷はなかったが、確かに効いているようだ。

サイガは攻撃の手を休めてはならないと判断し、蜘蛛に向かって走り出した。

レイラやザックのような遠距離攻撃をサイガは出来ない。例え巨

大な蜘蛛であろうと、近接戦闘に持ち込んだ方がサイガは戦えるのだ。

「羅ア！」

サイガは膝を蜘蛛の顔面に打ち込む。十二の瞳の間、眉間と思われる位置にサイガの膝が当たった。普通の打撃をそのまま当てても、怯む相手ではない。急所攻撃が適切と判断したのだ。

狙いは正しかった。蜘蛛は苦しそうに、脚を忙しなく動かしながら、赤く光る瞳を震わせていた。声無き苦しみである。

「どんどん行くわよ！」

蜘蛛の背後から、蒼い炎が火の粉を撒き散らして、襲い掛かった。前後の攻撃に蜘蛛は耐えきれなくなったのか、動き出した。八本の脚をそれぞれ器用に動かし、実験棟の外壁に登りだしたのだ。

「逃がすな！　ここで逃がしたら、また別の被害が出る！」

サイガは叫びながら、蜘蛛を追う。サイガは息を深く吸うと、気を足に集中させた。

蜘蛛と同じように、サイガは壁を登りだした、否、壁の上を走った。重力などお構いなしに、垂直方向に走る。この光景に下に居るレイラ達は啞然としていた。

「待ちやがれ！」

蜘蛛が実験棟の屋根上へと移動した。後を追って、サイガも屋根上に到達する。

「って、来てみたら良いが……俺一人じゃねえか」

レイラ達の援護射撃を期待しようとしたが、今居る場所が実験棟の一番上だ。

魔術の砲撃を行うとしても、高すぎるのだ。

しかし、蜘蛛はサイガを見据えていた。十二の瞳はサイガを逃がすまいと、睨んでいる。

熱くなりすぎたか、とサイガは少し反省する。自身としては冷静に対処していたつもりだったのだが。

「……いいぜ、かかってこいよ」

だが、ここまできた以上は引き返せない。腰を深くして、戦闘態勢を取る。

サイガは客観的に、勝てない相手ではないと判断する。

実験棟の上は他の建物に比べて狭い。その分大きさを考えると、巨大な蜘蛛は動きづらはずだ。サイガが動きやすい分、勝機はある。

幾つかの戦略を立てて、動こうとした時だ。

風が吹いた。

鋭い一筋の風が蜘蛛を貫いた。

洗練された螺旋の風が蜘蛛の背後から、サイガの上空へと吹き抜けたのだ。

蜘蛛は頭部と腹部とで切断された。切断面から血を噴き出しながら、蜘蛛は呆気なく絶命してしまった。

サイガは言葉を失っていた。サイガが見つめる先、上空に一つの影があった。

黒く長い槍を構えた、風紀委員長のカナメだった。

「大丈夫か？」

実験棟の上にて、突如現れたカナメの一撃で両断された蜘蛛の傍で、サイガは言葉を失っていた。今、サイガの目の前に居るのはそのカナメだ。

指ぬきグローブがはめられた手が差し出されている。サイガはそれを見ることしか出来ない。

「うん？ どうした？ 本当に大丈夫か？」

「あ、いや……じゃない……いえ、大丈夫です」

サイガは呆気にとられていた。槍による鋭い一撃が頭から離れない。

まるで黒い風が蜘蛛を穿ったようだった。

「と、ところで、この魔物は一体何だったんでしょうか？」

「それはこれから調べることだ。後の事は私達に任せて、サイガ君はもう帰りなさい」

「あ………そうですね。わかりました」

名前を覚えられていたことに一瞬動揺したが、サイガは気を保った。気になる事が幾つかあったのだが、カナメが言っている事も正しいので素直に従う。

カナメの視線を背中に受けながら、サイガは元来た道、実験棟の壁に気を集中させた指とつま先を突き立てることで重力による加速を抑えながら、滑り降りた。

「あ、サイガ。どうだった？」

レイラ達が心配そうに迎えてくれた。

サイガは上を見ながら、カナメが助けてくれた事を伝えた。

「そっか………さすが風紀委員長ね。たった一撃で倒すなんて」

「ああ………」

その後もレイラが何やら話してきたが、サイガの頭の中には入ってこなかった。

サイガの頭は別の事で一杯だったのだ。

蜘蛛が現れた原因。今朝の事件との関連性。

そして何よりも、カナメの姿が脳裏に焼き付いて消えなかった。

## 涙の理由

レーンベルク魔術学園の男子寮。その一室、二二五室はサイガの部屋である。

サイガはベッドで俯せになつて寝ていた。否、考えていた。今は制服を着ていない。部屋の中で過ごしやすい格好だ。

すでに太陽は沈んでいるが、夕食はまだ食べていなかった。それよりも頭が混乱していたのだ。

二重のショックがサイガを襲っていたのだ。

一つ目のショックがああ黒い突風だ。

「カナメ・モリヤ、レーンベルク魔術学園第三学年A組、成績は実技、学力共に優秀。特に実技なら現生徒会長で『四柱神<sup>フォーリス</sup>』の一族を継ぐ、セレナ・ハートを上回るとも言われている」

脳内に入っている情報を言葉にする。

「カナメは近距離と中距離、セレナ会長は中距離と遠距離をそれぞれ得意としているから、比べるのも難しいってのがあるか」

体を回転させ、仰向けの状態になる。白い天井を見つめる。

「にしても、あれは凄かつ……いや、恐ろしかった。俺も直前まで気配を感じなかった。これでもかなり修行したつもりだったんだがな」

サイガは回想した。

あの日……八年前のあの日以来、サイガは己を強くすることだけに時間を費やしてきた。少しの休息も許さず、少しの娯楽も許さず、全てを鍛錬に捧げた。

だからこそ、サイガは自信というものを持っていた。

しかし、久しぶりに見たカナメの実力を前に、サイガはショックを隠しきれずにいたのだ。

サイガはカナメの事を知っている。

向こうは気付いていないだろうが、変わり果てたサイガ自身の事

を考えると納得出来る。

一方、カナメはまったくと言っていいほど変わってなかった。

「昔っから、あんな感じだったよな……」

カナメを見てみると、人間というのは変化しない生き物なのかもしれないと思えてしまう。

変わりすぎた自分は異常だと、思えてしまう。

「センも変わってなかった」

カナメと同じような存在がもう一人居る、それが同じクラスに在籍するセン・ヒカゲだ。

初めて見たときは気が付かなかったが、自己紹介で名前を聞いてすぐに思い出した。

久々に見るカナメもセンも外見だけは昔のまま姿だった。

「もしかしたら、印象が薄いだけでセンも成長しているかもしれない。……はあ、強くなったと思いがついていた自分が恥ずかしいな」

自惚れていた、サイガはそう自覚した。

本気で授業外での自主練習の時間を計画しなければならぬと決意する。

「もしかしたら……今回の事件も放っておけばカナメ達が勝手に解決してくれるかもしれない」

事件のことも考えながら、サイガは悩んでいた。

カナメの光景と同時にある言葉がサイガの頭の中で響いていたのだ。

今までの回想はその言葉からの逃避に過ぎなかった。

その言葉がサイガを悩ませた。

二重のショック。もう片方のショックがあまりにも大きかった。

何故、サイガは悩んでいるのか。

寮の自室にて、過去の事を回想しながらも、悩む原因がサイガにはあった。

切っ掛けは数時間前。

蜘蛛出現事件が終わった後の、帰り道での会話だった……。

「私達で探ってみない？」

レイラが突如言い出した。

突発的な意見だったため、レイラ以外の三人は目を丸くして、言葉を失った。

「……お前、今何て言った？」

やっとの事で口を開いたのはサイガだ。

「だから、私達で事件を探ってみないかって言ったの」

「……何考えてるんだよ、お前は」

サイガは驚愕で叫び声が出そうになったが、それを飲み込んで冷静を取り繕った。

「俺らでどうこう出来る問題じゃないんだよ。生徒会や学園に任せとけよ」

「でも、風紀委員は役立たずのようだけど？」

レイラの意見にサイガは疑問を感じながらも、否定出来なかった。確かに、レイラの言う通り蜘蛛が現れた時、駆けつけたのはカナメ一人だったのだ。

近くには他の風紀委員が居たはずなのに、である。加えて、他の風紀委員は蜘蛛が現れる瞬間に気が付かなかったようなのだ。あんなにも強力な魔力の波をサイガ達は感じたというのに。

ただ、不自然な点もある。

一般的に考えれば、レーンベルクに通うほどの生徒が魔力に気が付かないのは有り得ないはずなのだ。

その事を「役立たず」の一言で片付けるのは、些か納得出来ない。サイガの考えをレイラに説明しても良かったのだが、レイラの言っている可能性も少なからずあるかもしれないと考えてしまい、説明しなかった。

本当に「気が付かなかった」という可能性が。

「魔力の波に、瞬時に反応出来ないようじゃ風紀を守る資格はないと思っただけどね」

「お前の意見には同感だが、その事が、俺らが捜査するという話にどう繋がるんだ？」

「それは私達は少なくとも役には立てるわよ。だからじゃない」

「お前な……」

サイガは呆れるように、溜息を吐いた。

「俺はまだいい。レイラが突っ走ったらそれを止めるために追いかける力があると自負している。だが、ザックやミシエルはどうなる？」

サイガの言葉に背後の二人が 特にミシエルが 息を呑んだ。

「ザックはまだ慣れてるかもしれない。だがな、ミシエルはまだ実戦に慣れてないんだぞ？ 蜘蛛と戦った時を思い出せよ。ほとんどレイラに任せっぱなしだったじゃないか」

冷酷とわかりながらも、サイガはあえてその事実を指摘した。

事実だからこそ、受け止めて欲しかったという思いがあったのだ。

「大丈夫よ。ピンチになったら私が守ってみせるわ」

それでも決意を変えようとはしないレイラは笑って、そんな事を言うのだった。

「あのな、そういう話じゃねえだろ」

「なに？ サイガはミシエルが足手まといって言いたいの？」

「足手まといとは言わねえよ。そもそも俺が否定してるのは前提そのものだからだ」

「前提？」

「俺らで事件の真相を究明しようとする前提だよ」

勇敢と無謀は違う。それはサイガが身を以て知っていた。

だから、サイガは慎重な姿勢を崩さなかった。

「逆に訊こうか、レイラ。どうしてそこまでこの事件を解決しようと思っ？」

「そんなもの簡単よ。これ以上の被害が出るのが、我慢ならないの」  
レイラは拳を握り締めながら、語り出した。

「まだ被害者は一人だって言えるかもしれない。けれど、それは次の被害者が出るかもしれないって事でもある。私にはそれが耐えられないの。次の不安があるって言うんなら、私はその不安を取り除きたい。私、自己紹介の時に言ったわよね？ 助け合ってるいける仲間が欲しいって。だから、私は仲間を助けたいの。仲間を守りたいの」

レイラの瞳にサイガの顔が映った。

揺るぎない瞳だった。

「そのためにここへ入ったしね」

その言葉で、サイガは止まった。

サイガに合わせて周りの三人も止まった。

レイラが学園へ入った目的。

それは漠然として、子供っぽさもあって、先の見えない目的であった。

だけど、それは誰よりも大きなものだった。

「みんなを守りたい。そのために私はここへ来た」

サイガはレイラを見た。

決意を秘めたその瞳には迷いなどなかった。

瞳に映るサイガはどんな顔に映っていたのだろうか。

その事を想像して、サイガは視線を外した。

「無責任、じゃないか？」

重たい口を開いて出たのは、そんな下らない言葉だった。

「そんな事ないわ。絶対守ってみせる。この命を賭けてでも」

「これから何が起こるか分からないんだぞ？ 今日は一匹だけだっ

たかもしれないが、明日は二匹現れるかもしれない」

「二匹とも倒してみせるわ」

「数だけが問題じゃない。今日以上の魔物が出るかもしれない」

「倒してみせる。守ってみせる」

「お前なあ！ 言葉ではいくらでも語れるんだよ！ 実際はどれだけ困難かわかるか!?」

ついにサイガは声を荒げて叫んでしまった。その叫びにミシエルとザックは驚いていた。

けれど、レイラはまったく動じなかった。

「やってみせるわ。それとも何？ サイガは怖いのか？」

「そうじゃねえ！ レイラが無謀なだけだろ！」

「無謀じゃない！ 私にはみんなを守ってみせる自信がある！」

「その自信が無謀だと言ってるんだよ！」

「何ですって!?!」

「もうやめて！」

二人の言い合いに、覆い被さるように叫んだのはミシエルだった。クールなイメージの彼女から考えられないほどの叫びに、サイガとレイラは思わず口を閉ざした。

「レイラ」

ミシエルはレイラの方を向く。しかし、その視線はレイラではなく下へ向けられていた。

「悪いけど、あなたの提案、私は辞退させてもらわ」

「ミ、ミシエル」

「サイガの言う通り、私には力がない。それを得るためにこの学園へ入った。でも、まだ学園は始まったばかり。模擬戦をやったとはいえ、私にはそんな力ない」

「そんな！ ミシエル、サイガが言ったことなんて気にしないでいいのよ。こいつはただ怖がってるだけなんだから」

こいつって、とサイガはレイラに指さされながら、苛立ちを感じた。

ミシエルは平静な声で答えた。

「レイラ。違う。サイガは正しい。サイガは悪くないわ」

「ミシエル……」

「ごめんなさい。私はこれで失礼する」

そう言って、ミシエルは早足で去ってしまった。

残された三人、レイラは自然とザックに顔を向けた。

「……悪いな。俺もパスさせてもらっわ」

「ザックまで!? どうして!？」

レイラは信じられないといった表情でザックを問い詰めた。

「だって慣れてるんでしょ? だったら、ザックは……」

「違うんだよ、レイラ。確かに俺は魔物退治に慣れてる。但し、隣にはいつも親父や親父の部下の人達がいた」

「あ……」

レイラは気付いたように、言葉を失った。

「お前らを信用してないわけじゃない。サイガに至っては模擬戦で俺を打ち負かしたしな。でもな、俺はいつも親父の指示で動いてた。ここへ入学したのも、もう指示なしで動けるようになりたいからだ。だから、今はまだ無理だ」

ザックは歩き出した。帰る先はサイガと同じ男子寮なのだが。

「レイラ。俺はまだ経験不足だし、力不足だ。まだ指示がなきゃ動けないような人間なのさ。だから、俺が居たらかえって邪魔になる。

……悪いな。それじゃ、お先!」

ザックはそう言つと走り去った。その背中を最後まで見送った後、サイガはレイラに向いた。

レイラは少し残念そうな表情で、ザックを見送っていた。

「レイラ」

本当は黙っていればいいものを、サイガは声を掛けてしまった。

レイラが振り向いた。

その目を見て、何か喋らなければならぬとサイガは感じてしまった。

だから、なのだろうか。

サイガは本当に……本当に余計な事を言ってしまったのだ。

「これでわかったら? 誰もお前に追いつけない」

言ってしまうから、サイガは失敗したと後悔した。

けれど、もう遅かった。

「サイガ、今なんて言った……？」

目の前に居るレイラの瞳が、初めて揺らいだ。

ただ、それは迷いからくる揺らぎではなかった。

その揺らぎは悲しみによるものだった。

「私言っただよね!？」

突如、サイガは胸ぐらを掴まれた。レイラの腕は華奢で細いものだが、力強さがあつた。

「サイガと総代である事を知られる前に知り合つて良かったって!

国王が私達一族に与えた名前が嫌いだつて言つたよね!? 次からは気を付けてつて言つたよね!？」

「レ、レイラ、俺は……」

「あんたも私の事を『フレリレス』としか見てくれないの!? サイガならそんなこと言わないと思つてた! 私が勝手に押し付けたイメージかもしれないと思うけど、それでも私は信じてた!」

サイガは何も言えなかつた。レイラと視線を合わせるのが辛かつた。

「この臆病者! 人を守れないのが怖い!? 人を助けられないのが怖い!? 怖いから、私を『フレリレス』と見ることで自分が普通だつて思いたい、そつでしょ!？」

「違つ! 俺は!」

「嘘付け! もういい!」

レイラは掴んでいた腕を振り解いた。

そのまま背中を向けて走り去ろうとした。

「サイガの事、信じていたのに……」

走り際にそんな言葉が聞こえて……。

それでも、サイガには止められなくて……。

結局、レイラの姿が消えるまで、サイガは立ち尽くしていた。

信じていた。

レイラの言った言葉が頭から離れなかった。だから、寮に帰ってきてからも、太陽が沈むまでベッドの上で悩んでいた。

レイラの言葉にサイガは色んな意味でショックを受けた。レイラを悲しませてしまった罪悪感というのものもあるが、それよりもサイガを悩ませていた原因がある。

信頼してもらえた事が、サイガにとって初めての事なのだ。だから、サイガは戸惑っていた。

今まで、自分を信じていた人間なんて居なかった。同じ場所に住んでいた他人や親戚、両親までもが、サイガを信じていなかった。そして、当時一緒に居た同年代の知り合いまでも。

だからサイガは誰も自身を信用していないと思いついていた。この学園で知り合った教師や生徒、誰もが格闘は出来るが魔術は使えない駄目な生徒として、自分を見ていると思っていたのだ。

でも、レイラは言った。確かに言った。信じていた、と。

「……つたく、どうしろってんだよ」  
どうするか、自分がどうするべきか、サイガはわからなかった。考えたが、何も思い浮かばなかったのだ。

「とりあえず腹減ったな」  
さすがに空腹を覚えたサイガは、何か食べようと冷蔵庫を開けてみる。

「何も無い……すっかり忘れてたな」  
今まで悩んでいて忘れていたが、本当だったら夕方に買ってくるつもりだったのだ。

とは言っても、腹を空かせたままにいるわけにもいかない。

この時間帯では食料品店も開いてない。だから、料理店へ行くことにする。

ちよつとした支出になるのが痛い。

部屋を出ると、ぼんやりと明るい廊下には誰一人としていなかった。

元々男子の割合が少ないから、という理由ではなく、皆この時間はおとなしく部屋にいるようだ。

男子の数が少ないのに、どうして女子寮と同じ規模の男子寮を作ったのだらうと疑問に感じたが、それはより男子を取り入れたいと学園側が考えたかららしい。

捕らぬ狸の皮算用なのではないか、とサイガは思った。

寮の建物を出ると、かなり暗い。

寮の前を横に通っている大きめの道を左に曲がる。右は学園方面だ。

左に進めば、街へ行ける。遠くの方で街の明かりが見える。

そよ風が吹いてきた所で、サイガは上着を着てくるのを忘れたことに気付いた。

少しばかり寒さを感じながら、サイガはズボンのポケットに両手を突っ込んだ。

辺りは暗かった。隣国のイオン国は街灯といって道を照らす灯火があるのをサイガは知っていた。そこに比べて街灯がないこの国の道は、暗闇に溶け込んでいた。

暗い道を歩きながら、サイガは何も考えなかった。

まさに空っぽ。

何も考えず、何も思わず、ただ食事を求めて街へと進んでいた。

室内で悩みすぎたせいかもしれない。今は何も考えなくなかったのだ。

しばらく歩き、ちょうど街と寮の中間地点ぐらいに辿り着いた。

ふと何か変な感覚が体を走った気がしたが、サイガは空腹と悩みすぎて疲れた事があり、あまり気にしなかった。

だからこそ、気が付かなかった。

サイガの背後、闇の中をゆっくりとサイガに近づく影があること

に。  
影は静かに片腕を振り上げると、サイガの頭頂部目掛けて、勢いよく振り下ろした。

ぴたり、と振り下ろした腕が止められた。

「舐めんじゃねえよ。背後を許したのも、直前で防いだのも、てめえが格下だからだ」

サイガの手が影の振り下ろした腕を受け止めていた。

そのままサイガは掴んだ腕を捻りながら、己の体を回転させる。

回転力の加わったサイガの足が背後に居る存在へと蹴りとなって打ち込まれた。

蹴った感触は妙に硬いだ。

鱗や甲殻と違う、変な感触だ。

サイガは暗闇に目を凝らして、背後の存在を視認した。

それはサイガと等身大のかまきり蟻螂だ。

暗闇に紛れるような黒と灰色が混ざった色合い。逆三角形の顔にある瞳も灰色だ。だが、その腕の先に持つ鎌は白く光っていた。体との対比で余計に白く見える。

蟻螂を見ながら、サイガは数時間前に学園で現れた蜘蛛を思い出した。

何故それを思い出したのかわからなかったが、直感が告げていた。

それと同じ存在だと。

「まさか……さっきの感覚は」

襲われる前に体を走った感覚を思い出す。

あれは間違いなく魔力の波だった。

この場所が外であることと、魔力の発生源が遠いことから無視していたが、蜘蛛が現れた時の魔力の波動と類似していた事を確信する。

「……って事は……俺が狙われた？」

校門前で倒れた女子生徒が脳内に浮かぶ。

そして、その女子生徒と自身が照らし合わされた。

次に狙われるのは自分かもしれない。

「　　っんな……」

サイガは心の底から湧き出る熱さを実感した。その熱さが肩を震わせる。

螻蛄は鎌にサイガを映しながら、巨大な目でサイガのことをじっと見ていた。

「　　っけんな」

肩だけではない。頭の芯まで震えている。

激動とも呼べる震えが、サイガを襲っていた。

サイガの眩きに螻蛄は気付いているのかいないのか、首を傾げる仕草をした。

「ざっけんなっつてんだよ！」

そして震えは頂点に達した。噴き出たものは怒りだ。沸点に達して、噴火した怒りがサイガの口から発せられる。

サイガの飛ばした怒号に動じず、螻蛄はただじっとしている。

「カナメの実力を見て落ち込んでいる所に、臆病者って罵倒されて、そしてなんだあ！？　二番目のターゲットは俺だっつか！？」

第一に自惚れていたこと。自信過剰ではなかった。それでも苦しい思いをして手に入れた力に対して、信頼を置いていたのは確かだった。だから、カナメを見たときに崩れ去った衝撃は大きかった。

見下したい訳ではない。自分が居なくなっただけから、相も変わらさず強くあつたカナメに対して、少しばかりの悔しさがあっただけだ。

第二に弱り目に祟り目であつたこと。少しばかりの悔しい思いをしていただけなら、ここまで激昂しなかった。だが、悔しくて弱っている自分に、たたみ掛けるようにレイラから罵倒を受けたのだ。何の迷いもなく、何の揺るぎも見せずに堂々としてるレイラが眩しく思えて、同時に不安に思えた。この先、この調子でレイラが進んだならば、いつか崩されるに違いない。崩されたとき、レイラは一

体どうなるのか。

そこにサイガは自分と照らし合わせた。

事件に向き合う姿勢が子供のように好奇心旺盛で、けれども熟練した人間のような覚悟を含んでいた。

サイガは前者の姿に自分の過去の姿と重ね、後者に憧れを覚えた。前者がある分、不安が絶えなくて、後者があるから自分とは違うものに対する戸惑いを覚えた。

だから、あんな余計な事を言ってしまったのか。戸惑って、混乱していたから、相手の事を考えないような愚かな発言をしたのか。それは今となっては本人にもわからない。

わかるのは後悔をしたという事。少しばかりの悔しさを覚えている時に、後悔という重みがのし掛かった。半端無く重かった。その重さに沈んでしまいそうだった。

けれども、第三がサイガに背負うことを忘れさせた。

サイガはすうっと息を吸うと、怒声と共に吐き出した。

「舐めんじゃねえよ、ああ！？俺のこと、臆病者ってか！？雑魚ってか！？」

第三に自分が狙われた事。自分が狙われるような存在である事。魔物の糧である事。

それはつまり、サイガには見下されているように感じられるという事。

サイガは足に力を入れ、飛び出した。

飛び込んだのは蠍の懐、鎌が入ることの出来ない領域だ。

「馬鹿にするんじゃないよ！」

一息で気を溜め込む。溜め込んだ気を掌に集中させると、蠍の胴体に打ち込んだ。

「羅アア！」

怯んだ蠍は、乱雑に鎌を振り回しだした。

サイガは乱れ舞う鎌を避けつつ、蠍と距離を置く。息を深く吸うと、手を開いた。指を真っ直ぐと揃えたその形はまさに手刀だ。

蠍の瞳がサイガを捉えた。長く曲がった鎌をサイガの首を刈り取るように、振り回した。

サイガは斜めから迫り来る鎌に目掛け、気を溜め込んだ手刀を打ち込んだ。

「破ア！」

パキンと高い音を立てて、鎌を折れた。

鎌が折れた事に蠍は首を傾げながら、もう片方の鎌をサイガへ振り下ろした。

「吸ウ……破ア！」

サイガは頭上に迫る鎌を横から手刀を打ち当てた。

バキンという鈍い音と共に、鎌は砕かれながら折れた。

両腕の鎌が折れてしまい、蠍は困った様に首を傾げる。

「首、傾げてばっかしてんじゃねえぞ！」

サイガは高く飛んだ。等身大の蠍の頭上に到達する高さだ。

「流アア！」

下半身に力を入れ、回転させる。回転に乗った足で蠍の頭部を蹴り降ろす。

蹴られた蠍の頭は地面へめり込んだ。蠍は折れた鎌で体を支えるように、頭を上げた。

その目の前にサイガは立っていた。

「いいぜ、吹っ切れたぜ」

サイガは清々しく笑う。今まで悩んでいた自分を下らないと笑う。負う必要のない重みに苦しんでいた自分が馬鹿馬鹿しく感じる。

鎌を失い、何もすることが出来ない蠍はただサイガを見上げていた。

「あの女、人の事を臆病呼ばわりしやがったな？ 阿呆が！ 無謀に突っ込んで痛い目見るのは、可能性の話じゃねえ。確実性の話なんだよ」

それはサイガが身を以て体験した話だ。だからこそ、サイガは確信した笑みを浮かべる事が出来る。

サイガは膝を曲げて、折れた鎌を拾い上げた。

「だから、俺が傍に居て面倒を見てやる。ただ馬鹿みたいに暴走するあいつの冷却剤になってやる」

それは決意だ。

初めて見た輝きに怯えるのではなく、その輝きが衰えることがないよう体を張って守るといふものだ。

自分と同じような結末を辿るのは、もう二度と見たくない！  
手に持った鎌を、振り上げる。

「やるからにはこの事件の真相を必ずや突き止める。黒幕が居るのならばぶっ飛ばす！」

良いか？

「覚悟しろ！」

鎌を頭部へと振り下ろした。

目と目の間を両断され、蠃螂の頭部は割れた。切断面から血が吹き出る。

それを見下ろしながら、サイガは笑った。

そして、視線を上空へと向ける。

星がサイガを照らしていた。



涙の理由（後書き）

大幅に改編しました、申し訳ありません。

## それぞれの役割

翌日の朝、サイガは待ち構えていた。

勿論、レイラをだ。

目的の人物が現れるまで、そんなに時間を要さなかった。

「何よ」

登校途中でサイガを見つけたレイラは、不機嫌そうにサイガを睨んできた。

うつすらと目元が赤い、どうやら昨日の件で泣かせてしまったみたいだ。

「そう睨むな。お前に言われて、少し冷静になってみたんだ。んで、ちよつとばかり考えてみた」

「……………」

レイラは黙っている。ただ、サイガの目の前から動こうとしないのは、サイガの話を聞こうという意志があるという事だ。

「一緒に探ってもいいぜ。事件の事」

「え……………」

ポカンと口を開けるレイラに、サイガは続ける。

「このままだとお前一人が暴走しそうだからな。俺が手伝ってやるよ」

昨日とは意見が百八十度反対へ変わっているサイガに対して、レイラは半眼を向ける。

「……………何それ？ それでお詫びのつもり？」

「ん？ 俺なんかお前に詫びるような事したっけか？」

「あ、あなたねえ！」

わざとらしく言うサイガに、レイラは詰め寄った。

「あんな酷い事しておいて、よくもそんな台詞が吐けるわね！？」

「……………」

「何か言いなさいよ」

「……近くで見て、確信したんだが……やっぱりお前、昨日泣いた  
る？」

「……！」

顔を真っ赤にして、目元を隠すように指で擦りながら、レイラは  
狼狽した。

「ち、違うつ！ こ、これは目が痒かったから！」

「別に目元の事に関して何も言っていないんだがな」

サイガの意地の悪い言葉に、レイラは眉間に皺を寄せながら、サ  
イガを睨んだ。

「サイガって、実は意地悪なのね」

「さあな。ま、でも、泣かせた事が事実ならば素直に謝るよ」

「え」

「この通りだ。すまない」

サイガは意地悪な笑みを消すと、頭を下げた。

サイガの行動にレイラはしばらく呆然とし、慌ててサイガの肩を  
掴んだ。

「ちょ、ちょっといきなり頭を下げないでよ！ びっくりするじゃ  
ない！ ほ、ほら、他の生徒が見てるから！ あ、頭上げて！」

内心、人の悪い笑みを浮かべながら、真剣な表情を崩さないでサ  
イガは顔を上げた。

「だけど、レイラ。レイラにも撤回してもらいたい」

「私？」

レイラは周りの視線を気にしながら、サイガに耳を傾ける。

入学式の時と言い、他人の視線に動じないと思ってたんだが  
……やっぱり強がってたのかもな。

「俺は臆病者じゃない。俺のあれは慎重な姿勢だ。だから、それを  
撤回してもらいたい」

「……でも……その」

「理解出来ないなら説明してやる。昔な、練習を積んで強くなった  
と思った俺は、ある日それなりの強大な魔物退治に出掛けたんだ。」

実力も付いたし、負けるわけがないと思ってた。目標の魔物は一体だった。だから、背後から不意を打って重傷を負わせた所を叩き込めば勝てるよ、勝算があった」

「……それで、どうだったの？」

「実際は一体じゃなくて二体居たんだよ。夫婦だった」

そのサイガの言葉に、レイラは眉をひそめた。

「俺はボロボロになって、命からがら逃げ出した。作戦を振り返って思い知ったんだ。俺は最初から敵が一体であると仮定していたから負けた。完璧に油断していたってな」

レイラは黙っている。ただ、少し理解出来るのか、辛そうな、悲しそうな、そんな表情をしている。

サイガが話したことは実際サイガの身に起こった話だった。

ただ、全てが事実だったわけではない。

相手が魔物という点だけ除けば、他は全て事実だった。

「わかるか。それは今回の事件にも言える。お前は自信ありげに守ると言ってみせた。それはそれで賞賛される覚悟かもしれない。だがな、覚悟だけじゃ、意味がない」

後半を強調させながら、サイガはレイラに手を差し出した。

「この事件に油断は禁物だ。だから、俺に協力させてくれ。事件はお前が率先して調べればいい。ただ、必ず俺の助言に耳を傾けて欲しい。危険な時は俺の指示に従って欲しい。お前の実力を馬鹿にしてるわけじゃない」

そこで一旦区切る。一息を入れてから、口を開く。

「レイラは暴走するだろうから、細かな所まで神経が回らないと思う。その役目を俺にやらせて欲しい。それで良いな？」

何処の部分を強調したのか、それがレイラにも伝わったらしく、悲しげな表情は消え去り、レイラらしい明るい顔へと戻る。

「……ふふん。なかなか言ってくれるじゃない？」

嬉しそうな口調で、レイラは笑みを浮かべる。

「良いわ。そこまで言うなら、私の傍で戦って。私の事を、支えて」

あの日、入学式で初めて会った時のように、お互いしっかりと握手を交した。

それをサイガは目で確認すると、力を入れてレイラを引き寄せた。「え！？ ちょよ！」

「但し、一つ言いたことがある」

至近距離に狼狽したレイラの真っ赤な顔、対峙するのは眉を吊り上げるサイガの顔だ。

「ミシエルやザックは巻き込まない。あいつらに迷惑だ。だから、直接的な支援は諦める」

「わわわ、わかってるわよ！ その、だから、早く……放してよ」

「人の話を最後まで良く聞け。俺は？直接的な？と言ったんだぞ？」

「え、それって？」

サイガはレイラの手を放すと、口の端を吊り上げるように笑みを浮かべた。

「あいつらには別の方法で役立つてもらおう。そう言っているんだ」

「情報収集？」

授業前、ミシエルとザックは口を揃えて言った。

サイガの考えとは、実戦に参加しない二人には事件の情報を集めてもらおうというものだった。

レイラは納得しながら、サイガの話に耳を傾けた。

「そ。レイラや俺が動くだけじゃどうにもカバー出来ない範囲ってのがあある。そこをお前らで押さえてもらいたいって話だ」

「でも、サイガ。私達はこの学園に来てまだ日が浅い。だから、そこまでこの学園に精通していかないのだけだ」

「ああ、それはわかってる。でも、実は一つだけ宛があるんだよな」「それって？」

首を傾げる一同に示すように、サイガは教卓を顎でしゃくった。

「あ、そっか！ エミスとマリー！」

レイラが気付いたように声を上げた。

「そうだ。あの二人なら担任として、気軽尋ねられるだろうよ。」

「でも、あの二人がそんな簡単に答えてくれるかしら？」

レイラの疑問にミシエルやザックが賛同した。

「そうだけ。特にマリー先生なんてめちゃくちゃ口が堅そうだしよ。難しいと思うぜ？」

「エミス先生も一筋縄ではいかない。あの人、おちゃらけてるようで、芯はしっかりしてる。」

「勿論、そんなの承知さ。だから、お前らには一つ芝居を打つてもらう。」

「芝居？」

訝しむように眉間に皺を寄せるミシエル達に、サイガは耳を近づけるよう手招きする。

耳を近づけた二人に、サイガは一通り伝える。

「……本当にそんなんで上手くいくのかー！？」

胡散臭そうな顔で、ザックは言った。

「ああ、上手くいく。ま、実際この作戦には本来の目的とはちょっとした矛盾が生じちまうんだけどな。ぶっちゃけしようがないと考  
えてる。」

「はあ……ま、いいぜ。それで俺がエミス先生に、ミシエルがマリー先生で良いんだな？」

「ああ、ザックは逆がお望みだろうが、お前の紙みたいな精神ではマリー先生の相手が務まらない。」

「そ、それは……否定出来ない。」

ザックを除く一同が嘆息。

「でも、切っ掛けはどうすればいい？ 悟られないように話掛けるには、一般的な話題が必要だと思う。」

ミシエルの意見にサイガは頷きながら、答える。

「お前らに何か悩みがあるなら、それを利用するんだが……生憎無

いからな」

「利用するって……もつと他に言い方あるでしょ!？」

「悪かった。でも、実際の話題なんて他愛のないもので良いんだよ。魔術の指導をお願いしたり、授業の助言を求めたりな」

そこで授業開始の鐘がなった。同時に教室の扉が開かれる。

開かれる扉を見ながら、サイガは口の端を吊り上げた。

「担任を頼れって言ったのは、他でもない本人達なんだからな」

「それで、私達はどうするの?」

昼休み、打ち合わせ通りミシエルとザックは、それぞれ情報の収集のため職員室へと向かった。残されたレイラとサイガは中庭の石造りのベンチに座りながら、軽い昼ご飯を食べていた。

「うん、俺らも別々に分かれようと思っている」

片手に持ったパンを咀嚼しつつ、サイガはもう片方の手で口元を拭いた。

「レイラ、お前は風紀委員長の所へ行ってくれ」

「カナメ先輩?」

疑問符を浮かべたレイラの表情に、サイガは説明する。

「昨日の一件を問い詰めてもいいし、蜘蛛を倒した事でお礼を言いに行ってもいい。とにかく、あの先輩とは友好的な関係を築いてくれ。俺らが勝手に行動を起こせば、迷惑を掛ける形になると思う。」

だから、予め手伝う事を伝えておく方が向こうもこっちも動きやすいって話だ。いざとなったら助けってくれそうだしな」

「なるほどね。つまり風紀委員を頼るんじゃなくて、カナメ先輩を頼れって事ね?」

「」明察」

サイガはパンを食べ終わると、果実を取り出し、丸嚙りする。

「そういうことならわかったわ、任せて。で、サイガは?」

「俺か？俺はトップに会いに行く」

意味を理解してか、目を丸くしているレイラ。

水筒の水を煽りながら、サイガはその顔を見つめる。

「どっかの馬鹿がストーカー紛いの情報網を持っていた事を思い出してな。有り難く有効活用させてもらった」

「え、何それ？」

「お前は気にしなくていい。とりあえず、話はここまで」

囁り終えた果実の芯を近くに設置してあったゴミ箱に捨てながら、サイガは水を煽る。

「昼休みは長くないって、身を以て知ってるだろう？」

「ふふ、そうね。なら、急がなくていい。教室で落ち合いますよ」

「ああ、朗報を期待してる」

「そっちもね」

視線を交し、レイラとサイガはそれぞれの向かうべき場所へと向かった。

レイラが向かった先は三年生の教室だけが集められた建物だ。

学年ごとに建物を分けてくれたのは有り難いと思いつつ、レイラは足を踏み入れた。

「手当たり次第当たっても良いけど……時間が惜しいわね」

建物内の廊下を行き交う生徒。レイラにとつての先輩方がレイラに対して好奇心な視線を向けてくる。

じっとしていると、いつかみたいに変な男子に声を掛けられてしまふ。三年生は一年生と違って、男子の数が多い方なのだ。

「あの……すみません」

「はい？」

近場を通った女性の先輩に話掛ける。優しい表情を浮かべる先輩を見て、レイラは親しみを込めた笑顔を作りながら、尋ねた。



大声を上げて驚いた。そのせいで教室中の注目が集まる。

「まったく……それでは騒がしくなる前に行こうか」

「あ、はい！」

今まで見守っていたレイラは、カナメの後を追った。

背後で教室から出たたくさんさんの顔が、こちらを見ていたことに気が付かないで。

「それで用件は何かな？」

移動した場所で、さっきまでいた建物の外壁に身を預けながら、

カナメが腕を組んだ。

「ええ。先日の蜘蛛退治は素晴らしい手柄でしたね」

「……何だ、君までそんな下らないことを言いに来たのか」

残念そうに眉尻を下げるカナメを見て、レイラは慌てる。

「いえいえ。ごめんなさい、今は社交辞令です！」

「む、そうか。では本題があるのだな」

「ええ。でも、先輩、どうしてそんな嫌そうな顔をなさるんですか？」

レイラの質問にカナメは溜息を漏らしながら、答えた。

「うむ。巨大な蜘蛛の出現をいち早く察知し、見事被害を押さえたという事で、午前中はちやほやされててな。さすがに嫌気が差していたんだ」

「ごめんなさい……何も考えず言ってしまっただけ」

「気にするな。君は一年だし、知らなかったのだろ。それに蜘蛛を倒した事は風紀としての義務もあれば、私個人としての信念でもある。……それよりも本題はどうした？」

「あ、はい。あの、単刀直入に言いますね」

レイラは咳払いを一つすると、表情を一転。真剣な眼差しでカナメを見つめた。

「どうして他の風紀委員は察知出来なかったのですか？」

「……………」

カナメは鋭い双眸でレイラを射貫いた。  
貫かれそうな錯覚を覚え、レイラはたじろぎそうになるが、堪える。

「私、あの時、たまたま蜘蛛の近くに居たんです。確かに私は感じました。蜘蛛が現れる瞬間、強い魔力の波動を。でも、学園を巡回してた風紀の人達、まったく気付いた素振りを見せなかったんです」「……ふう、屋上で蜘蛛を倒したとき、あの男の子が居たことをもう少し深く考えるべきだったな」

カナメを天へ視線を向けながら、声量を抑えて話し始めた。

「その件に関して、我々も調査中だ」

「調査中？」

「うむ。蜘蛛を倒した後、屋上をぼけつと見上げていた部下共が居たので、叱咤した。しかし、誰も気が付かなかったと言うのだ。私を除いた全員がな。これは不自然だと思つて、部下以外の、つまり風紀以外の人間に調査を頼んでる。個人的に信用出来る人間だ」「そうですね……失礼ですけど、カナメ先輩以外は役立たずだと考えてました」

「君は結構な毒を吐くな」

苦笑いを浮かべるカナメに、レイラは満面の笑みを浮かべた。

「でも、結果はそう語ってますでしょう？」

「そして、容赦ないな」

カナメの正面に立っていたレイラは、カナメの隣に並ぶと、彼女と同じように外壁に体重を預けた。

「もう一つ訊きたい事があるんですが、よろしいですか？」

「遠慮は要らない」

「信念って言いましたね？ どんなものなんですか？」

カナメは鋭い双眸を細めながら笑みを浮かべると、槍に手を添えた。

「昔から貫いているものでな。『守るべきもののために、全ての障害を貫く』というものだ。この槍を持った時から、ずっとこの信念

を守ってきた」

カナメは隣を見た。

隣のレイラは瞳を輝かせて、カナメに顔を近づけた。

「かつこいいです！ 憧れますよ！」

「そ、そうか？」

「はい！ 私もそういつた信念を持ちたいです！」

「……………信念を貫いているのが憧れる、か。実際は縛られているだけかもしれないな」

「先輩？」

突如として、暗い雰囲気のカナメにレイラは疑問を感じる。

「いや、独り言だ。気にするな」

その時、カナメの瞳が揺らいだのをレイラは見逃さなかった。

人間のそういつた所に人並み以上に敏感だと自覚していたレイラだった。

「先輩…………先輩の『守るべきもの』って何ですか？」

驚いたように目を見開きながら、カナメはレイラを睨んだ。

睨んだ、と言ってもカナメ独特の鋭い視線ではない。

まるで、追い詰められた小動物が悪あがきの威嚇で見せる睨みだった。

「…………先輩、私がこの学園に入った理由って何だと思います？」

「……………何かな？」

「守りたいものを、守るため」

カナメの槍に添えていた手が、力強く槍を握った。

「…………君には敵わないな、レイラ・フレリレス。どうして、勘付いた？」

「私って、そういうの敏感なんです」

無邪気な笑顔で言うレイラに、カナメは苦笑いを浮かべるしかなかった。

一つ、大きく息を吐くと、カナメは語り出した。

「『守るべきもの』は確かに存在したさ…………八年前までな」

「っ！」

あまりにも唐突な過去だった。レイラはただ、黙って待った。

「酷く、後悔したよ。私が傍に居れば守れたかもしれないって、ずっと悔やんでた。そして、そう悔やむ度に、自分の持つ信念が脆く見えてね。悩んだ。何の為にこの槍を持つ？ 何の為にその刃をもって貫く？ とな」

「先輩……」

「ふふふ……こんな話、同級生にもしてないぞ。君が初めてだ、レイラ・フレリレス」

「……ごめんなさい。思い出させてしまいましたか？」

「いや、気にするな。語り出したのは私の方からなんだ。君が気に病むことなんてない」

「……はい」

カナメは体を起こすと、槍を脇に挟むように携えた。

「少し話が長くなった。そろそろ失礼するが、大丈夫か？」

「はい……あ、先輩」

「ん？」

「私、事件を追いますよ。守りたいものがありますから」

「……そうか」

「だから！」

「？」

レイラは走る。途中で振り返り、大きな声で、叫んだ。

「先輩も事件を追って下さい！ そして、絶対にその信念を曲げないで下さい！ 私は、先輩の、信念を、馬鹿にしたりなんかしません！」

言い終わると、笑顔で頭を下げて、走り去る。

そんなレイラの事をカナメは眺めながら、呆然としていた。

「……まったく、変な子だ」

すぐに苦笑いへと表情が変化すると、天空を見上げた。

「そう思うだろ？ サイガ」

この時間はいつもここに居る、犯罪臭漂う情報は的確であった。近づこうとしたサイガは一目見て、動きが止まった。

場所は学園校内の裏手、生徒会本部があるという本館と呼ばれる建物の裏手にある庭だ。庭と言っても、中庭の規模には及ばず、噴水が一つ存在するだけだ。

その円形の噴水に、腰掛けながら水に入れて涼む女性の姿があった。

真つ直ぐと伸びた白銀の髪。気持ちよさそうに細める瞳は琥珀の輝きを湛えている。細い鼻筋に、潤いを帯びた唇。その容姿は美しいの一言だけでは収まらなかった。

彼女の傍に小鳥たちがさえずりながら擦り寄る。彼女は小鳥たちに優しく微笑む。

その光景は一枚の絵画を思わせた。

「何か用ですか？」

透き通るような声が、サイガを現実へと引き戻した。

琥珀色の瞳がサイガを捉えていた。

サイガは頭を冷やすように、左右に振りながら、女性へと近づいた。

「初めまして、セレナ・ハート生徒会長。俺はサイガ・ムトウ。第一学年D組に所属するものです」

「存じます」

存じてる、と来た。生徒会長は生徒一人一人を把握しているのだろうか。

例え、把握してるとしても大して驚かない事実だが、とサイガは思った。

「少しばかりお話があつて参りました。お時間、よろしいですか？」  
「うふふ。ええ、良いわよ」

砕けた言葉遣いで、セレナは自身の隣の石畳に手をぼんぼんと叩いた。

その動作に、サイガは戸惑いを覚えながらも素直に従い、隣に腰掛けた。

小鳥たちはセレナの陰に隠れる。

サイガとしてはセレナの隣に来た途端、体の芯が冷えるほどの緊張感に襲われていた。

「どんなお話を聞かせてくれるのかしら？」

「ええ。最近学園で魔物が現れたのはご存知ですよね？」

「ええ、存じてるわ」

「ならば、昨晚学園寮に同じような魔物が現れたことは？」

「まあ！」

口に手を当てて、驚くような仕草をする。いや、本当に驚いているのかもしれない。

サイガはこの話をこの時のためにずっと秘密にしていた。無論、レイラに対しても話してない。

きっと襲われた本人以外知る生徒は居ないだろうと踏んで、情報を保持し続けた。

少しでも知っている生徒が居たら、この生徒会長の耳に入る可能性があったからだ。

彼女に接触し、関心を向けるような話題には最適な情報である。

事前に知られては今みたいな関心を向けさせる事は無理だっただろう。

「詳しい時間帯をお願い出来るかしら？」

食いついてきたセレナはサイガに更なる情報を求めた。これはサイガの狙い通りである。

「はい。時間は日を跨ぐ少し前……十時半ぐらいです」

「それで魔物は？」

「学園に現れたのと同じ系統の魔物、形はかまきり螻蛄でした。幸い、寮が襲われる前に駆除できました」

「あなたがやってくれたんですの？」

「というよりも、俺だからでしょうね」

意味ありげな表現でさらなる会長の関心を向けさせる。

「と言うと？」

「現れた魔物、俺の推測では俺を襲うために現れたかもしれないのです」

「根拠は？」

「俺が外出したのを狙ったかのように現れたからです」

「ふふふ……そんな時間に外で何をしようと考えたのかしら？」

予想してなかった事を言われ、サイガは答えに窮する。

「あ、い、いえ！ その……遅めの夕食を街で」

とは言っても嘘を言うよう場面ではないので素直に白状する。

「あら、そうでしたの。遅すぎる食事は体に毒ですよ」

「お気遣い、感謝します」

「いえいえ。これも生徒会長としての役目です」

ふふふ、と微笑むセレナはおもむろに靴を脱いだ。

裸足になると、それを噴水の水へと浸した。

「あなたもいかが？」

一瞬だけ魅惑的な誘いに乗りそうになるが、

「いえ、遠慮します」

サイガは抑えた。一緒の水に浸ることは身の程をわきまえないと考えることで。

「そうですね。気持ち良いのに」

本当に気持ちよさそうに目を細めるセレナを、サイガは見ながら考える。

セレナ・ハート。レイラと同じ『四柱神』<sup>フォーース</sup>であるハート一族の名を継ぐものだ。

フレリレス一族が 火 の魔術を得意とするならば、ハート一族は 水 。

当然、セレナも 水 の魔術を扱う。

けれど、セレナの異名が、彼女のもう一つの特徴を説明していた。  
「…………『絶氷』」

サイガは心の中で呟いたつもりだったが、口に出てしまった。  
「あら、その名をご存じでしたの？」

「失礼。つい言葉に出てしまいました」

「お気になさらず。その名は私も好んでますもの」  
そうセレナが口にした瞬間。

感じた。

サイガは咄嗟に跳び上がった。体を回転させ、噴水の方へ向き直る。

しかし、すでにそこは「水」ではなかった。

すでに、そこは「氷」だった。

噴水から吹き出る水は全て、凍っていたのだ。

噴き出した形のまま氷と、その前に腰を下ろす白銀の女性はこれまた絵になった。

「素晴らしい反射神経ね。そう逃げずとも、あなたを巻き込むような真似はしなくてよ」

「会長。お言葉ですが、すぐ隣に座る人間が突然魔力を発すれば、誰だって驚きます」

「ですが、大丈夫ですよ。現に…………ほら！」

セレナが上体を動かした。その奥から噴水の間近を歩いていた小鳥たちが元気そうにさえずっていた。

「おわかりになって？」

「…………腕を信用してなかった訳ではありませんよ」

気を取り直して、サイガは再びセレナの隣に腰を下ろした。

「サイガさん。私の話も聞いて下さる？」

「喜んで」

「はい、それでは…………私、ハート一族の者として社交界に顔を出すことが度々ですの。学園が始まる前には隣国のイオン国のパーティに招かれましたわ」

単なる自慢話か？ とサイガは感じたが、生徒会長の事だ、何か他にあるに違いないと考え直し、話に集中した。

「その時、向こうの方から大きな霊石をいただきましたの。有り難く受け取ったんですが、少し問題がございました……」

霊石というのは鉱物の一種だ。

隣国イオン国は鉱石に恵まれた土地だ。その鉱石を使ってあるいは動力とすることで技術を発展させ、帝国や王国にはない機器を作っている。

サイガの部屋にある冷蔵庫もその一例だ。

そんな鉱物の一種である霊石は、非常に貴重な代物だ。

本来なら鍛冶屋などへ持って行き、加工することで、強力な魔術回路を装着した武器や防具、道具を作ることが可能とする。

ただ、この霊石はかなりの魔力を宿している。

故に、その魔力が原因で問題が生じることもある。

「運ぶのが苦労すると？」

サイガの答えに、セレナは嬉しそうに頬を緩めた。

「ご名答。魔力が膨大ですもの、運ぶ際に魔力に惹かれた魔物達をおびき寄せてしまいますわ。ですから、魔力の波動を抑える結果用防護札で包んでから、後日送ってくるように頼みましたの」

魔力を宿す霊石は、常に魔力の波動を放出している。

そして、それに反応する魔物が多数存在する。

もし運搬する際に、そのままの形で運搬すると、魔物達の格好の獲物なのだ。

なので、通常はセレナが言ったように特殊な防護札で包んで、魔物達に狙われぬよう魔力の波動を抑えるのだ。

セレナは疲れた表情で息を吐いた。

「そしたら、どうなったと思います？ 向こうの方、わざわざこの学園に送りつけてきたのですわ。確かに私個人へ送られた物でしょうけど、学園の先生方に迷惑が掛かりましたわ」

「相手には配慮が足りませんね」

サイガの相槌にセレナはサイガが見たことないほど声を荒げた。  
「ええ、ええ！ 同じ事を思いましたわ！ 仕方ないので、現在は生徒会室に置かせてもらってますわ。すぐにでも実家へ送りたいのですが、ここから実家が遠いものですから、今週一杯は生徒会室の中、ですわ」

自慢話ではなく、どうやら単なる愚痴のようだ。

生徒会長と言えど、完璧な人間ではない。こうやって愚痴としてストレスを外へ発散させなければ辛い、という事もあるのだろう。

「ふう…… 申し訳ありません。取り乱してしまっただようですわ」

「いえ、俺で良ければいつでも愚痴を聞きますよ」

「ありがとうございます。恩に着ますわ、サイガさん」

セレナが微笑んだ。

その微笑みに、サイガは顔を赤くしながら立ち上がった。

「会長。俺は個人で魔物に関する事件を追います」

「そうですか」

「止めないんですね？」

「ええ。信用してますよ、サイガさん」

「はい」

頭を下げて、去ろうとする。

寸前で動きを止めて、再び振り返った。

「会長。女子生徒が襲われた件ですが」

「はい」

「俺は、彼女が魔物に襲われた、とは考えてません」

「……サイガさん。その言葉の意味、理解して言っていますね？」

「勿論です」

セレナの琥珀色の瞳が細められた。鋭くなつた視線はサイガではない、何処かを射貫いていた。

「わかりました。何かあったら、またここに来て下さい。私はこの時間はいつもここに居ます」

「承知しました」

それでは失礼します、と頭を下げてサイガは今度こそ教室へ戻っていった。

その背中を見送りながら、セレナは微笑みを浮かべた。

「頑張つて下さいね」

事態はより深刻に……

集めた情報の交換は放課後に行われた。

サイガ達は夕焼けの光が差し込む教室に残っていた。昨日の蜘蛛の一件があつてか、居残りをしているのはサイガ達だけだ。情報を交換する状況としては最適な形である。

レイラは普段は触れられない教卓に座りながら、他のメンバーは各々の場所に座りながら、話を切り出す。

「まずは俺らからだな」

ザックとミシェルが収穫について、切り出した。

「サイガに言われた通りにして、エミスに聞いてみたんだけど……

やっぱり無理だな。あの人、ヘラヘラ笑いながら『大丈夫だから安心して』とか言つて、なかなか口を開いてくれなかった。ありや

冗談で実は何にも知りませんでしたって言われても、信じられるな」

「私の方も無理だった。さすがマリー先生、まるで見透かされてるみたいだった。一応サイガに言われた通りにやってみたけど、それでも無理。先手を打つみたいにな、こちらの質問を封じてきた」

「やつぱ無理か。ま、こんなもんつてわかつてたけど」

サイガが首を捻りながら感想を漏らす。

教卓の机に直に座るレイラは足を振り子のように動かしながら、サイガに尋ねる。

「そう言えば、私は聞いてなかったんだけど、サイガは二人に何を吹き込んだの？」

「ん？ 何のこと？」

「ほら、言われた通りにしたつてやつ」

「あゝ、はいはい。別に難しい事じゃない。怖がる演技をして、蜘蛛に遭遇したことを素直に告白しろつて言ったのさ」

サイガとしては今回の仕事で、二人の教師から情報が集まるとは思つていなかった。いくら蜘蛛と遭遇しようが、怖がる演技をしよ

うが、教師達のやる仕事は一つだ。

それは生徒の安全を守る事。

つまり、自分たちが裏で行っている調査に関する情報を与える動機はないという事だ。

それをわかっていた上で二人に役割を与えたのは他の思惑があったからである。

「あゝ、なるほど。それなら心配してくれるかもって考えたのね」  
そんなサイガの考えを知らずに、レイラは納得したと頷く。

「サイガ。私にも気になることがある」

今度はミシエルだ。ミシエルはその知的な瞳を細めながら、サイガを見つめた。

「朝、サイガ言っでなかった？ 本来の目的とは矛盾が出来るって」

「ああ、そんなこと言っただな。気にしなくても良かったんだが」

サイガは机の上に足を載せる。だらしなく、無礼な姿勢だが、今は礼儀作法を気にするような相手は居ない。

「怖がる演技をして、教師に詰め寄る。それって魔物が現れる度に成功確率が上がっていくのがわかるだろ？」

「あ、そうか」

ミシエルが気付いたように声を上げた。他の二人がもう少しでわかりそうな顔をしていたので、サイガは続ける。

「でも、俺たちが情報を集めるのはこれ以上の被害を抑えるため。

つまり、これ以上の魔物の出現をなくすためなんだよ。そこが矛盾してる」

「あー！ 確かに！」

レイラもザックも理解したようだ。

そもそもサイガには、別の思惑でミシエルとザックを担任教師に接触させたのだ。それはいくらやり方が矛盾していようが、サイガには構わない作戦である事を示していた。

「でも、だったらする意味がなくなる？」

当然、そのような指摘は受けると思っていた。

レイラの問いに頷きながら、サイガは予め考えていた答えを出して否定する。

「確かに、でもまったく意味が無い訳でもない」

「と言うと?」

サイガは人差し指を立てて、説明する。

「一つ目、教師達のモチベーションだ。ただ教室の雰囲気から察するのではなく、実際に職員室に訪れて、相談を受けさせることで、直接的に生徒が不安な状態にいるという事をわからせるんだ。事件を解決するには少しでも手が欲しいからな」

二本目の指を立てる。

「二つ目、そもそも俺らは事実蜘蛛の被害に遭っている。この事を黙っていること自体が不自然だろ? 普通は報告する。だから、ミシエル達に報告させた。この報告で俺らも教師達が保有する情報をもらえれば、ラッキーだったんだが、まあ、やっぱりそうは上手くいかず。でも、報告するだけでも教師達も動きやすくなったはずだ」  
「つまり、サイガはミシエル達に情報収集の役割を与えるようで、実際は別の役割を与えたのね?」

まあな、とサイガは肯定する。ミシエルも理解しているような顔つきだったが、ザックだけが理解出来てないのか疑問符を浮かべていた。

「え? え? どういう事?」

「サイガは私達に伝言の役目をさせたって事」

「はあ……」

惚けた顔で、尚理解に苦しんでいるザックにサイガはわかりやすく説明する。

「つまりだ。俺はお前とミシエルをパシラせたんだよ」

「な、何〜!?!」

「いや、遅いって」

レイラのツッコミでザックは怒るに怒れないような、すっきりしない表情になった。

そこでレイラとミシエルの視線がサイガに集まったので、サイガは三つ目の指を立てようとして……。

止めた。

「まあ、こんな所だ。本音を言っちまうと、俺らが報告してると時間がなくなるから、お前らで代理させてもらったって話だ」

「酷いやり口ね。私までパシリさせたみたいじゃん」

「巻き込んで悪かったな。でも、必要な人数が二人だったんで都合良かったんだよ」

そう言っつて、サイガは視線を逸らした。

上げようとした三つ目の指、つまり三つ目の考え。

それは言っつてはならないと、サイガは口に出す寸前で判断した。

そんな事を言っつて、下手をすれば、ミシエル達を傷付けてしまおうと思っつたからだ。

サイガの三つ目の思惑、それは常に教師達の動向を探りたいというものだった。

本当ならサイガが直接会うことで表情の変化から本心を読み取ったりするのだが、サイガにも他にやりたい事が色々とある。それに失敗すれば、マリーのような聡い相手に逆に見抜かれてしまう場合もある。そこで、そういつた下心がない生徒を接触させることで、教師達の本心を引き出せるかもしれないと考えたのだ。

そう口実を作ること、間接的に教師達の動向を見張るというのが、サイガの策だ。

どうしてここまでして建前を作った上で、教師の動向を探りたいのか。

それはサイガが最悪のケースも考えていたからだ。

「最悪なケース、ねえ」

ボソリとサイガは呟いた。呟きながら、サイガはレイラを見る。

レイラはミシエル達と真剣な表情で犯人像について話し合っている。

もしも、その最悪ケースを伝えて、それを考慮した上でミシエル

達を使っていた事をレイラに知られれば……。

間違はなく怒る。しかも過去最高に。

レイラがサイガの視線に気付いて、話掛けてきた。

「どうしたの？ 何かわかった？」

疑りを知らない純真な瞳。サイガは罪悪感を覚えながらも、何でもないと首を振ろうとする。

そこで、あの感覚が四人を襲った。

「っ、おい！」

「クソツたれ！ レイラ、何処かわかるか！？」

「この方角は……校門よ！」

体を起こし、力強い勢いで教室を飛び出した。

同時に、遠くの方で悲鳴と轟音が響いた。

「まさか、こんな堂々と襲ってくるとはな……ますます黒幕の考えていることがわからなくなってきたぜ」

校門に到着した四人が見たものとは、逃げ惑う生徒、戦闘態勢を構える風紀委員、怯えて足が竦んでいる女子生徒、そしてグシヤリとひしゃげた校門だった。

「生徒の安全を確保しろ！ 倒すことではなく、足止めを優先しろ！」

風紀委員の腕章を付けた男子生徒が声を荒げて、叫んでいる。足止め役として同じく風紀の腕章を付けた学生が結界用の魔法陣を展開している。

その風紀委員が睨む先、力尽くで無理矢理折り曲げられた校門の所に黒い影が居た。

巨大な二本の巻き角、黒い肌走る灰色のたてがみ、そして血のように真っ赤に染まった瞳を持った猛牛だ。

蹄で地面を削りながら、荒々しい息づかいで睨んできている。

「今まで以上に最悪な相手だな」

風紀委員の背後から魔物の様子を窺いつつ、サイガは冷や汗を垂らす。

「そうね。やっと骨のある奴が来てくれたって感じかしら」

レイラは予想通りの好戦的な表情を浮かべている。否、既に『蒼炎』の魔力を練り始めている。隣に居るサイガはレイラから熱気が伝わってきているのを肌で感じている。

「待て、レイラ。戦いたい気持ちもわかるが、ここは風紀委員に任せるべきだ」

「え、だって私の方がよっぽど戦力になるよ？」

「そうじゃなくて、集団で行動している所に横槍を入れるなど言っているんだ。風紀委員がやるうとしてるのは足止め。あいつらはあれを倒すつもりはない」

「でも、どうして？」

「色々理由はあるが……一番は止めを刺せる人間を待っていることだろうな」

サイガの言葉にレイラは気付いたように目を見開くと、期待に満ちた笑みを浮かべた。

しかし、笑みを浮かべながらその口からは非難の言葉が流れる。

「他人任せってわけね」

「せめて役割分担というフォローしてやれよ」

その時、地響きが鳴った。黒い猛牛が突進してきたのだ。数人の風紀委員が構える。

結界に衝突した。猛牛は二本の巻き角を結界へ力任せに押し付けて、破壊しようとしている。その巨大な体から想像出来る力が、結界魔術を張っている生徒を苦しめる。

「きついんじゃない？」

「でも、俺らが割り込む余地はない。俺らは緊急要員だ。結界が壊れたら動くぞ」

おっけー、とレイラが首肯する。ザックとミシエルも頷いた。

押し合いをしていた猛牛は結界から一旦離れた。距離を取って、蹄で地面を削りながら力を溜めている。

「ヴオオオオオ！」

荒々しい鳴き声と共に、再びの突進。その衝撃で結界は限界に達した。

「クソツ！ レイラ！」

「承知ー！」

結界が砕け散る音とともにレイラは『蒼炎』を放った。今まで溜めに溜め込んだ魔力は猛牛を怯ませる程だった。

「今の内に離れて！」

レイラが叫ぶ。結界を作っていた風紀委員はそれを聞き取ったのか、走って後退してきた。そして、距離を取ると今度は撃退用か、攻撃魔術を練り始めた。

猛牛がこちらを睨んだ。レイラの一撃で怒らせてしまったらしい。ただでさえ大きな赤い瞳が見開かれると、猛牛は突進してきた。

「突進しか脳がないのね！」

レイラの『蒼炎』、そして風紀委員による魔術の射撃が一斉に行われた。

しかし、猛牛は降りかかる魔術の弾丸に動じず、突進のスピードは増すばかりだった。

「離れる！」

風紀委員の男が叫んだ。皆が一斉に回避しようと、構えた時だ。

「間に合ったか！」

叫んだのはサイガだ。サイガが見る先、猛牛の頭上に黒い槍を構えた女性の姿があった。

「はああああ！」

カナメだ。カナメの槍は猛牛の巻き角を絡め取るように、地面へ縫い付けた。

頭部の片側に重みがのし掛かり、バランスを崩して横転する猛牛。その隙に、全員が猛牛の直線上から離れた。

「今度は私が遅れた番だったな。皆、よく持ち堪えてくれた」

カナメの言葉に風紀の面子が顔を綻ばせ、はい！ と答えた。サイガの背後から飛び出した影が、カナメへ近づいていった。

「先輩！」

レイラだった。レイラはカナメの隣に並ぶと、両手に『蒼炎』を宿した。

「援護します！」

「……わかった。頼んだぞ！」

「はい！ ……………先輩」

「何だ？」

「守りましょう！ みんなを！」

「……ああ、そうだな」

何やら会話を交しているが、サイガの今居る位置では聞き取れなかった。だが、わかることはレイラとカナメが共に戦闘態勢を構えていることだ。

猛牛が起き上がった。その際に頭を震わせることで、角を振り回した。

咄嗟に反応したレイラとカナメが後退する。荒々しく振られる角は地面を抉り、木を折り倒した。

「ヴォオ！」

猛牛はレイラとカナメを睨むと、何かを考え込むように、おとなしくなった。

「見栄張って頭なんか使わないで、突っ込んできなさいよ！」

挑発したのは言うまでもなくレイラだ。だが、頭が悪い牛にそもそも言葉など通用せず、猛牛は急旋回すると、別の方向に向かって突進したのだ。

「しまった！ 魔術を放て！」

カナメが叫んで、風紀が魔術を放つが遅かった。放たれた魔力弾はどれも擦りもせず、外すばかりだった。

「この野郎！ 逃げるなー！」

両手に『蒼炎』を纏ったレイラが両腕を振った。射出された二つの『蒼炎』が螺旋に回りながら、猛牛を追尾した。

旋回しながら、『蒼炎』は猛牛の腹に命中。猛牛を宙に浮かせるほどの威力は、そのまま猛牛を校舎へと突き飛ばした。

豪快な音を立てて、建物の外壁に穴が開いた。

「つて、ちよ！ お前、校舎壊すなよ！」

「えへへ……つい手加減出来なくて……」

またすぐに轟音が響いた。崩れた外壁の瓦礫に埋もれていた猛牛が、瓦礫を吹き飛ばしながら起き上がったのだ。

猛牛はレイラを睨んでいる。炎の攻撃が誰の手によるものかは理解出来るようだ。

「レイラ、来るぞ！」

「わかってる！」

猛牛は頭を振ると、咆哮した。草木が揺れるほどの咆哮に身が竦みそうになる。鳴き終わったのと同時に、走り出した。四本の足が地面を蹴り、風を突き破ってくる。

「無理に対抗することはない！ 受け流せ！」

カナメの指示で、その場にいる全員が退避をした。

否、その時は全員だとサイガは思い込んだいた。

猛牛はカナメとレイラの近場で急停止すると、前足に力を入れて体を持ち上げ、後ろ足で周りへ蹴りを飛ばした。

「くっ！」

単純な直線運動であると思っていたカナメ達は蹴りから逃れるため、無理な体勢による回避を余儀なくされた。

それが仇となった。

猛牛は自身の周りから誰も居なくなつたのに気付き、蹴りを止める。首を回して、その赤い瞳に倒れている生徒を捉えた。

「しまった！」

声を上げたのはサイガだ。

倒れていたのはミシエルだった。猛牛の突進で全員が退避したの

だと思っていたが、ミシエルはその場で倒れていた。もしかしたら誤って、足を痛めたのかもしれない。

「ミシエル！」

レイラの悲痛な叫びも虚しく、猛牛はすでに照準をミシエルに合わせていた。

レイラ達が急いで魔力を練り始める、しかし、間に合うかは不安だ。

ミシエルの顔に戸惑いの色が見える。体が思うように動けないのに、困惑した表情だ。

サイガが助ける為動こうとしたその瞬間に、猛牛が走り出した。

ミシエルは動けない。

二本の巨大な巻き角が、ミシエルに突き刺さろうと迫った。

「どうやら、こっちも間に合ったみたいだな！」

サイガは安堵の笑みを浮かべる。

二本の巻き角がミシエルを襲う瞬間、上空から何かが猛牛の眉間に向かって投げられた。袋状のそれは眉間にぶつかり、中から煙り状の粉末を吐き出した。

突然の粉末に猛牛は苦しそうに瞼を閉じて、必死に首を振って煙を払い出した。

呆然としているミシエルの前に上から何かが舞い降りた。

「ミシエルさん、こっちはです」

そこに現れたのは、三つ編みの眼鏡少女、センだ。

普段見るセンからは想像出来ない真剣な目つきだ。センはミシエルの手を取ると、猛牛の脇をすり抜けて、カナメの元へと避難した。

「カナメさん！」

「センか！ すまない！」

「それよりも、あれを！」

思い掛けない助けに一同は安心していた。そこを叱咤するようにカナメが叫ぶ。

「あいつの動きは止まっている！ やるなら今だ！」

その声に、レイラとザック、そして風紀の面子が魔術による一斉射撃を行った。

遠距離が苦手なサイガは見てるだけだ。

ザックと風紀による魔力弾が霰のように猛牛を襲い、止めとばかりにレイラの巨大な火の玉　サイガは気絶させたやつだ　となつた『蒼炎』が爆発を起こした。

爆風に吹き飛ばされた猛牛の体は校舎を突き破って、奥へと消えた。

「やったかしら？」

「わからねえな。とりあえず、警戒を怠らない方が良い」

崩れた校舎の奥、暗い陰へと目を凝らす。

しかし、ドガンという爆碎音と共にさらに校舎が崩れた。その奥には未だ立ち上がる猛牛の姿があった。

「まだ起き上がるか!？」

「勘弁して欲しいね、まったく」

サイガは溜息を漏らしながら、猛牛を注視した。

まったくの無傷ではなく、体の所々が赤く出血した部分がある。

レイラの『蒼炎』を受けたのだ、恐らく火傷もしているだろう。

「あれなら一瞬で終わらせられる！　皆、射撃準備だ！」

風紀の男子生徒が声を上げた。

もう傷だらけの相手だ、確かに、止めを刺すなら今だろう。

レイラやザックも自信満々の表情で魔力を練り上げている。

だが、サイガだけは違った。

サイガは何か引つ掛かるような、違和感を覚えた。それを探ろうとして、頭の中で思考を繰り返す。

そして、今朝のレイラとの会話を思い出す。

『完璧に油断していた』

サイガ自身が言った台詞が脳内で再生された。

その台詞が危険信号として、周りへの警戒を一気に高めた。

「違う……」

「サイガ？」

レイラの心配する声も届かない。

サイガの心臓が異様に脈打っている。これはサイガの本能だ。経験によって研ぎ澄まされたサイガの本能が危険を知らせている。

だとするならば、居るはずだ。サイガの考える危険因子が。

「上だ！」

サイガは皆の注目を集めるため、腹の底から大声を出した。見上げる。その上空には翼を広げた影が存在していた。そう、敵は一体ではなかったのだ。

サイガの叫びは間に合っていた。

しかし、それに対する周りの反応が遅かった。

それが原因だった。

「キイヤアアアアア！」

甲高い声が上空で響き渡った。上空を滑空していた黒い羽毛に覆われた鳥が、サイガ達に鋭い黄色の嘴を向けて、急降下してきた。

「まずい！」

咄嗟に反応出来たのはカナメだけだった。

カナメは持つている槍を鳥に向けると、横から払うように大振りで薙いだ。

だが、風を体で知る鳥はそれを軽々と避けて、再び急上昇した。

「別の奴も居たのか！？」

魔力を練り上げていた面子も上空に注意を向ける。しかし、その瞬間に見上げた顔が一斉に絶望の色へと染まっていった。

「嘘………だろ」

上空を飛んでいる鳥が一匹ではなかった。

二匹、三匹、四匹………今も尚その数が増えているように見える。

「数が………数が多すぎる」

間違いなくあの鳥は群れて行動する種族だ、とサイガは判断する。「となると……自然と対処法が浮かんでくるな」

「サイガ、何かあるの!？」

「群れてるって事はリーダー格がいるはずだ。それを狙えば!」

「リーダーって……どれよ!？」

サイガは上空の群れへと目を凝らす。

気を目へと集中させることで、視覚を鋭敏化させた。その中で一つ、一際大きな体格を持った個体を見つけた。

「多分あれだ。あのでかい一体」

「わかった! でも、どうやってあれだけを仕留めれば……」

「レイラは遠距離担当だから、何かあるんだろ!？」

「うーん……あー! 面倒だから全部焼き殺す!」

「早えな! もうちよつと考えるよ!」

それでもレイラは『蒼炎』の魔力を練り始めた。

「ごめん、みんな。ちよつと今まで以上の魔力で行くから気を付けてね」

レイラはそう言うと、瞑想し始めた。

レイラの魔力がこみ上げて来るのがわかる。じわじわと熱気が伝わるのだ。その魔力の大きさは、レイラの周囲の地面を熱し、焦がす程までに至った。

「これが『蒼炎』の上位、『蒼焰』よ」

蒼い炎がレイラを覆った。レイラの体全体が蒼い炎を纏っているようだ。

「熱いな……これは期待出来そうだ」

「ええ、期待して下さいよ、カナメ先輩!」

強気な笑みを浮かべると、レイラは上空へと手を伸ばした。

「これでも喰らえ!」

伸ばした手の先に、蒼い火の玉が浮かび上がる。両手で抱える程の大きさまでになると、蒼い火の玉から、**焰**の魔力弾が連射された。

蒼く光る 焔 の魔力弾は、黒い鳥の群れへと飛び込んだ。群れの中で中規模の爆発を起こし、見事な具合で鳥たちを攪乱している。「風紀も遅れを取るな！」

カナメの叱咤で、風紀委員達に気合いが入る。ザックも含めて一斉に上空へ向けて、魔術を発射した。

「さて、我々はあちらかな」

今まで傍観を保ってきた猛牛は、カナメの視線に気付くと、鼻を震わせた。

「セン、生徒の避難を頼むぞ」

「了解です、カナメさん」

「サイガ・ムトウ。行けるな？」

「寧ろやっとな動けるって感じですよ」

サイガは腰を低く構えた。前へ飛び出る構え方である。

「俺が隙を作ります。先輩はそこを狙って下さい」

「出来るのか？」

「ええ。やってみせます」

猛牛が角を突き出した。後ろ足の蹄で地面を削り、力を溜めている。

「タイミングは先輩にお任せします」

「ああ、任せろ」

カナメが槍を真っ直ぐ構えた。姿勢を低くして、重心を据えた構えだ。

沈黙が流れる。耳に入るのは魔力弾を放つ音と、鳥の鳴き声だ。

「ヴオオオオオオオ！」

「行け！」

猛牛とほぼ同時に飛び出した。

サイガは走る。迫る猛牛の巻き角に怯まず、正面から捉える。

そして、跳躍した。猛牛の突進を跳躍によって避ける。サイガの跳躍した背後から、カナメの槍が伸び出した。

「そこだ！」

突き出された槍が、猛牛の喉元を捉えた。

サイガが跳躍した事によって、猛牛の視線は若干だが、上へと向けられた。それによりほんの少しの隙間が生じた。そこをカナメは狙ったのだ。

喉元に当てられた槍は傷を負わせることは出来たが、貫通するまでには至らなかつた。

猛牛は喉元を槍に支えられる形となり、苦しげに鳴きながら前足をばたつかせる。

しかし、まだ猛牛の上にはサイガが飛んでいる。

サイガは下半身に力を入れる。気を脚に集中させて、狙いを定める。

狙うは猛牛の太い首だ。その首に向かって、サイガは膝蹴りを打ち下ろした。

衝撃が加わり、猛牛の喉は貫かれた。

貫いた瞬間を狙ってカナメが槍を引き抜いた。引き抜かれた箇所から、猛牛の血が噴き出る。

声帯を貫かれ、猛牛は苦痛の声も出せず、自棄になったように暴れた。

「うお！」

猛牛のすぐ脇に着地したサイガは、暴れる猛牛の巻き角に突き飛ばされた。

「サイガ！」

レイラが悲痛の叫びで、サイガの名前を呼んだ。

サイガは角が当たる寸前で防御をしていたので、すぐに受け身が取れた。

しかし、目の前に猛牛が迫っていた。

「ぐうお!？」

咄嗟の判断で、巻き角を両手で掴んで猛牛の動きを止めた。

猛牛は貫かれた首を動かさない様子だ。ひたすらサイガの事を力押しする。

サイガも負けじと、力で猛牛の巻き角を押さえつける。

埒が明かねえ………だったら！

「吸ウ……………」

サイガは目を閉じ、呼吸を整える。体に流れる気を調節する。

そして、目を開くと同時に、気を放った。

「『突蹴閃』！」

初めは打ち出された膝蹴りだ。サイガの膝蹴りが猛牛の顎を蹴り上げた。膝を打ち出した脚はそのまま地面に固定し、それを軸とすることで体を回転させる。蹴り上げられた猛牛の顔、見上げる位置にあるその顔に、体を一回転させる事で活かした勢いを、もう片方の脚に乗せる。その脚の踵で猛牛の顔を横から蹴り飛ばした。

サイガの蹴りによって頭部に衝撃が走ったであろう猛牛は、目眩を起こしているのか動きが鈍くなった。

それは絶好の的だった。

カナメの黒い槍が猛牛の体を横から貫いた。位置的に恐らく心臓の貫いただろう。

確かな手応えを感じ取ったカナメは、ゆっくりと槍を引き抜いた。猛牛の体はゆらりと横に崩れ去った。

「こちらは終わったな」

「あつちもみたいですよ」

サイガが見上げる先、上空ではレイラが放った『蒼焰』により、最後の鳥が焼かれ、落ちていく所だった。

「やつほー、そつちも終わったみたいね」

「レイラは熱そうな魔術使って、涼しそうな顔するんだな」

「まあね。気分爽快だし」

腕を伸ばして、体をほぐしながらレイラは満面の笑みを浮かべた。「こちらも終わったようですね」

背後から声を掛けられた。声と共に流れてきたのは寒いとも感じるほどの冷気の籠もった風だ。この冷気にサイガは身に覚えがある。

「……………生徒会長」

セレナ・ハート、そして彼女の傍には副会長のレイス・アンダーが立っていた。

レイスがカナメに近づいた。

「風紀委員の諸君、そしてカナメ委員長。今回はご苦労だった」

「いや、当然のことをしたまでだ。ところで、どうしてここに？」

レイスがセレナへと視線を移した。だが、その視線はセレナのさらに奥の方へも注がれた。

「……先生」

セレナの背後から、エミスとマリーが揃って歩いてきたのだ。

「いや〜……こりやまた酷いね。こっちよりヤバインじゃない？」

「こっち？ エミス先生、それって……？」

レイラの問いにはマリーが答えた。

「別の箇所でも魔物が出現しました。我々はそちらの対処へ向かっていたのです」

その事実にはサイガ達は息を呑んだ。

一匹、二匹の話ではない。二桁は数えられる状況であったのだ。

「セレナ会長……お願い出来るかな？」

エミスの眉尻を下げた表情のお願いに、セレナは琥珀色の瞳を細めて答えた。

「明日の朝、緊急集会を体育館にて行います」

セレナの緊張が皆に伝わった瞬間だった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5644w/>

---

切れないモノ

2011年9月25日03時10分発行